

松江市文化財調査報告書 第174集

松江鹿島美保関線（北浦工区）

防災安全交付金（交通安全）工事に伴う発掘調査報告書

北浦松ノ木遺跡

松江鹿島美保関線（北浦工区）防災安全交付金（交通安全）工事に伴う発掘調査報告書

北浦松ノ木遺跡

二〇一六年

鳥取県松江市教育委員会・公益財団法人松江市スポーツ振興財團

平成28(2016)年3月

島根県松江市教育委員会
公益財団法人松江市スポーツ振興財團

松江鹿島美保関線（北浦工区）
防災安全交付金（交通安全）工事に伴う発掘調査報告書

北浦松ノ木遺跡

平成28(2016)年3月

島根県松江市教育委員会
公益財団法人松江市スポーツ振興財団

例　　言

1. 本書は、平成 26 年度に委託を受けた、松江鹿島美保関線（北浦工区）防災安全交付金（交通安全）工事に伴う北浦松ノ木遺跡の発掘調査報告書である。
2. 本書で報告する発掘調査は、島根県松江県土整備事務所から松江市教育委員会が依頼を受け、公益財団法人松江市スポーツ振興財団が実施した。
3. 本調査地の名称・所在地は以下のとおりである。

(名 称) 北浦松ノ木遺跡
(所在地) 島根県松江市美保関町北浦 622 番地 2

4. 現地調査の期間
平成 26 年 8 月 8 日～平成 26 年 9 月 26 日

5. 開発面積及び調査面積

開発面積 9679.5m²
調査面積 256.0m²

6. 調査組織

依頼者 島根県松江県土整備事務所
主 体 者 松江市教育委員会

【平成 26 年度】 現地調査

主 体 者	松江市教育委員会	教 育 長	清 水 伸夫
事 務 局	松江市歴史まちづくり部	部 長	安 田 憲 司
	〃 文化財統括官（埋蔵文化財調査室長兼務）	錦 織 康樹	
	〃 まちづくり文化財課	課 長	永 島 真 吾
	〃 〃 埋蔵文化財調査室	調査係 係 長	赤 澤 秀 则
	〃 〃	専門企画員	穴 道 元
	〃 〃	主 任	川 西 学
調査指導者	島根県教育庁	文 化 財 課	主 幹 深 田 浩
実 施 者	公益財団法人松江市スポーツ振興財団	理 事 長	清 水 伸夫
		埋蔵文化財課	課 長 三 島 秀 幸
		〃 調査係	係 長 古 藤 博 昭
		〃 調 査 員	廣 濱 貴 子（担当者）
		〃 調査補助員	原 英 誉

【平成 27 年度】 報告書作成業務

主 体 者	松江市教育委員会	教 育 長	清水 伸夫
事 務 局	松江市歴史まちづくり部	部 長	安田 憲司
	まちづくり文化財課	課 長	永島 真吾
	〃 専門幹（埋蔵文化財調査室長兼務）	飯塚 康行	
	〃 埋蔵文化財調査室 調査係 係 長	赤澤 秀則	
	〃 〃 〃 主 任 徳永 隆		
	〃 〃 〃 〃 曜 託 門脇 譲也		
実 施 者	公益財団法人松江市スポーツ振興財団	理 事 長	清水 伸夫
	埋蔵文化財課 課 長	曾田 健	
	〃 調査係 係 長 川西 学		
	〃 〃 調 査 員 廣瀬 貴子（担当者）		
	〃 〃 調査補助員 門脇 祐介		

7. 調査に携わった発掘作業員

岩成博美、大西将祺、加藤恵治、齊藤幸夫、福田紘治、船越律、峰谷一雄、和田章

8. 本書に記載した遺物の復元・実測・淨書、遺構の淨書は以下の者が行った。

金坂昇、坂本玲子、角優佳、須藤佳奈子

9. 報告書作成にあたっては、以下の方々から多大なご指導、ご教授、ご協力を頂いた。記して感謝の意を表したい。（順不同、敬称略）

京都大学文化財総合研究センター 千葉豊

島根県教育庁文化財課 埋蔵文化財調査センター 企画幹 柳浦俊一

島根県教育庁文化財課 古代文化センター 研究員 稲田陽介

広島大学総合博物館 埋蔵文化財調査部門 研究員 石丸恵利子

10. 自然科学分析（第 5 章）の第 1 節 AMS 年代測定は文化財コンサルタント株式会社に委託し、第 2 節 動物遺存体については石丸恵利子氏に鑑定を依頼した。

11. 繩文土器は柳浦俊一氏に所見して頂き、ご教示を得た。

12. 動物遺存体は写真図版のみを掲載し、第 5 章第 2 節の動物遺存体観察表（表 3）と対比可能なよう H-1、H-2、H-3…と遺物番号を付けている。

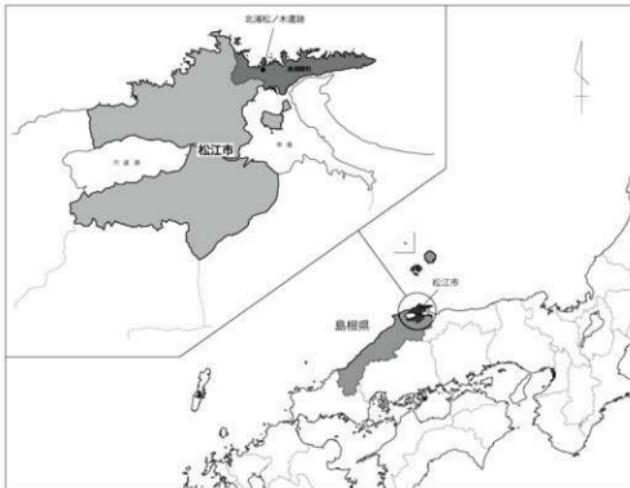
13. 本書の執筆は第 1 章を徳永隆（松江市埋蔵文化財調査室）が、第 2 ~ 4 + 7 章を廣瀬が、第 5 章第 1 節を渡邊正巳氏（文化財コンサルタント株式会社）が、第 5 章第 2 節を石丸恵利子氏が、第 6 章を柳浦俊一氏が執筆した。また、編集は松江市埋蔵文化財調査室の協力を得て廣瀬が行った。

14. 本書における土器区分、分類、編年は以下を参照した。

〔縄文土器〕

泉拓良・家根祥多 1985 「第 1 章 北白川追分町遺跡出土の縄文土器」『京都大学埋蔵文化財調査報告Ⅲ—北白川追分縄文遺跡の調査—』 京都大学埋蔵文化財研究センター

- 幡中光輔 2012 「山陰地域の縄文時代中期末土器考—中期末から後期初頭への系譜的検討—」
『島根考古学会誌』第29集 島根考古学会
- 柳浦俊一 2003 「山陰中部域における縄文時代後期土器の地域性—とくに「中津式」の小地域性について—」『立命館大学考古学論集Ⅲ』 立命館大学考古学論集刊行会
- 柳浦俊一 2010 「各地域の土器編年 4.山陰」「西日本の縄文土器 後期」 真陽社
- 柳浦俊一 2000 「山陰地方縄文時代後期初頭～中葉の土器編年—中津・福田K・2式土器群、縁帯文土器群の地域編年—」『島根考古学会誌』第17集 島根考古学会
- 矢野健一 1994 「北白川C式併行期の瀬戸内地方の土器」『古代吉備』第16集
15. 本書に掲載する土層は『新版 標準土色帖』農林水産省農林水産技術会議事務局監修：財団法人日本色彩研究所 色票監修に従って表記した。
16. 本書における方位は公共座標北を示し、座標値は世界測地系に準拠した公共座標第III系の値である。また、レベルは海拔標高を示す。
17. 本書における遺構及び遺物（石器）の略号は以下のとおりである。
遺構・・・NR：自然流路 ST：墓壙 SP：柱穴
遺物（石器）・・・UF：使用痕のある刺片 RF：加工痕のある刺片 SC：スクレイパー
18. 本書の遺構番号のうち、柱穴については調査時に設定したものを報告書作成にあたり振り直した。
番号の新旧については第4章第3節の表1に掲載している。
19. 出土遺物、実測図及び写真等の資料は松江市教育委員会で保管している。
20. 島根県・松江市の位置を下図に示した。



島根県・松江市位置図

目 次

例言

第 1 章 調査に至る経緯	1
第 2 章 位置と歴史的環境	2
第 1 項 地理的環境	2
第 2 項 歴史的環境	2
第 3 章 調査の方法	5
第 4 章 調査の成果	7
第 1 節 調査の概要	7
第 2 節 基本層序	7
第 3 節 遺構と遺物	9
第 5 章 自然科学分析	26
第 1 節 北浦松ノ木遺跡発掘調査に係る AMS 年代測定	26
第 2 節 北浦松ノ木遺跡出土の動物遺存体	28
第 6 章 考察	33
山陰地方中部域における縄文時代中期後葉～後期初頭土器の変遷 —北浦松ノ木遺跡出土縄文土器の意義—	
第 7 章 総括	44
遺物観察表	50
写真図版	
報告書抄録	

挿図目次

第 1 図	開発範囲図	1
第 2 図	周辺の遺跡分布図	4
第 3 図	調査範囲図	5
第 4 図	試掘トレンチ出土遺物実測図	6
第 5 図	遺構全体図	7
第 6 図	調査区土層断面図	8
第 7 図	ST01 実測図	9
第 8 図	柱穴群実測図	10
第 9 図	柱穴群出土遺物実測図	11
第 10 図	NR01 実測図	12
第 11 図	NR01-26 層出土遺物実測図①	14
第 12 図	NR01-26 層出土遺物実測図②	15
第 13 図	NR01-27 層上面検出状況図	16
第 14 図	NR01-27 層上面出土遺物実測図①	17
第 15 図	NR01-27 層上面出土遺物実測図②	18
第 16 図	NR01-27 層出土遺物実測図	20
第 17 図	NR01-28 層出土遺物実測図①	21
第 18 図	NR01-28 層出土遺物実測図②	22
第 19 図	NR01-29 層出土遺物実測図	23
第 20 図	NR01-30 層出土遺物実測図	24
第 21 図	NR01-31 層出土遺物実測図	25
第 22 図	埋土出土遺物実測図	25
第 23 図	調査区平面図及び試料採取地点	26
第 24 図	曆年鉛正図	27
第 25 図	較正年代の分布図	27
第 26 図	北浦松ノ木遺跡の燃系文土器他と里木Ⅱ・Ⅲ式中段階・新段階	35
第 27 図	北浦松ノ木遺跡と山陰地方中部域の北白川C式	36
第 28 図	山陰地方中部域の里木Ⅱ・Ⅲ式	37
第 29 図	山陰地方中部域の中前期未古段階	39
第 30 図	山陰地方中部域の中前期新段階	40
第 31 図	山陰地方中部域の後期初頭土器の系譜と変遷図	41
第 32 図	北浦松ノ木遺跡における堅穴建物跡想定図	47
第 33 図	島根県における範文時代中期末土器出土の遺跡分布と系統別一覧	48

挿表目次

表 1	柱穴群一覧表	11
表 2	AMS 年代測定結果	27
表 3	動物遺存体観察表	31
表 4	動物遺存体種名一覧表	32
表 5	縄文土器 - 地文・器面調整痕内訳表	49
表 6	外面 - 地文・器面調整痕内訳表	49
表 7	NR01 出土黒曜石内訳表	53
表 8	石製品内訳表	53

写真図版目次

本文中写真 写真 1 ST01 出土人骨	10
図 版 1	北浦松ノ木遺跡調査前全貌（南西から）、完掘状況（北東から）
図 版 2	完掘状況（東から）、調査区北東側土層断面（南から）
図 版 3	ST01 遺物出土状況（南東から）、ST01（南東から）、NR01-27 層上面検出状況（南東から）
図 版 4	NR01-27 層上面遺物出土状況（南東から）、NR01-27 層上面炭化物検出状況（北西から）
図 版 5	NR01 遺物出土状況（縄文土器の底部）、NR01 遺物出土状況（シカの下顎骨）
図 版 6	試掘トレンチ出土遺物、ST01 出土遺物、柱穴群出土遺物、NR01-26 層出土遺物①
図 版 7	NR01-26 層出土遺物②、NR01-27 層上面出土遺物①
図 版 8	NR01-27 層上面出土遺物②、NR01-27 層出土遺物
図 版 9	NR01-28 層出土遺物、NR01-30 層出土遺物、NR01-31 層出土遺物、NR01- 埋土出土遺物
図 版 10	NR01 動物遺存体・堅果類

第1章 調査に至る経緯

県道松江鹿島美保関線は、島根半島東半における主要な生活道路であるが、松江市美保関町地内的一部分で幅員が狭く、歩道も整備されていなかったことから、道路の拡幅工事が計画された。また、これに伴い道路と直交する河川の改修も行われることとなった。

この事業計画範囲において、平成22年3月に、埋蔵文化財の有無照会が松江市教育委員会へなされた。これを受け、松江市文化財課（平成26年度からまちづくり文化財課）において、当該事業範囲の分布調査を行ったところ、2箇所の要試掘調査範囲が確認され、平成24年5月と10月に順次試掘調査を実施した。それにより、河川改修予定範囲に設定した調査区（T-1）で、縄文土器多数を含む遺物包含層を確認した（第4図）。このことから、道路東側の河川改修範囲について、平成24年10月に遺跡の発見通知が提出され、「北浦松ノ木遺跡」として周知されることとなった。なお、遺跡の範囲を特定するために、道路西側の河川改修範囲で追加調査（T-2）を実施したが、厚い造成土に阻まれて成果が得られず、遺跡の西側は今後も未調査地としている。

以上のとおり、事業予定地内に遺跡が発見されたため、事業者と協議を重ねたが、事業計画の変更是困難であるとの判断に至った。よって、平成25年7月に発掘通知が提出され、このことについて県教育委員会と協議した結果、遺跡にかかる事業範囲について発掘調査の勧告を受けることとなった。これにより、平成26年8月から当該遺跡の本発掘調査を実施するに至ったものである。



第1図 開発範囲図 (S=1:10,000)

第2章 位置と歴史的環境

第1項 地理的環境（第2図）

北浦松ノ木遺跡は、松江市美保関町北浦に所在する。美保関町は島根半島の東端に位置し、北側は日本海に、南側は中海と中海から日本海に抜ける境水道に面している。南岸部は斜面が急斜面で落ち込み、比較的単調な海岸線を形成している。一方、北岸部は日本海に山地が迫り、深い入り江になった海岸線が連なる独特的海岸である。

美保関町北浦は、島根半島北岸部の日本海に面した地域である。北側の沿岸部には、北浦や稲積の浜が広がり、北浦集落の大半はその一帯に存在している。本遺跡は、稲積の浜から約500mほど内陸側に所在し、南側から北側に派生する丘陵と丘陵の間を流れる小河川、馬見谷川の右岸に位置している。馬見谷川は本遺跡の下流で稲積川と合流し、日本海に注いでいる。本遺跡の北側、日本海に突出したところには、標高172mの麻仁祖山が存在している。調査地の現況は田畠である。地形から推察すると、谷に土砂が堆積した後、谷水田として利用されてきた場所である。

第2項 歴史的環境（第2図）

島根半島における遺跡は南岸部に多く、当遺跡の所在する北岸部には少ない状況がみられる。本稿では、島根半島東側（島根半島東端を除く）の遺跡について、その歴史的概要を述べる。

縄文時代：縄文時代の遺跡は島根半島南岸部に多く、特に境水道に面した沿岸部に多くみられ、海蝕洞窟を利用した洞窟遺跡などが確認されている。前期の遺跡としては、サルガ鼻洞窟遺跡（33）、池ノ尻遺跡（35）、早田遺跡（31）がある。サルガ鼻洞窟遺跡は国の史跡に指定されている。縄文土器をはじめ、石器、骨角器、装身具や獸骨、貝類など多くの遺物が出土し、土器は前期末から晩期まで出土している。長期に渡って継続しており、当該期の生活が窺われる貴重な資料となっている。池ノ尻遺跡からは、縄文地刻目微隆線文土器等の他、打製石斧や石鏹が出土し、早田遺跡では爪形文土器が採集されている。他に、中海沿岸に夫手遺跡（42）や寺ノ脇遺跡（38）がある。夫手遺跡は、島根半島の谷から流れ出す小河川の河口付近の平地に位置する遺跡である。建物跡は検出されていないが、土器と一緒に木製の櫂が出土している。縄文土器は前期から晩期まであり、土器のなかには縄文時代前期の漆液容器が認められた。寺ノ脇遺跡では、早期から晩期の土器が出土している。

後期から晩期の遺跡では、国の史跡に指定された権現山洞窟遺跡（25）がある。土器や骨角器、石製品、貝類が出土している。小浜洞窟遺跡（21）は後期後半から晩期の遺跡で、土器の他、人骨、骨製尖頭器、耳栓型土製耳飾りなど多くの遺物が出土している。権太作遺跡（39）では後期末から晩期の土器が、井尻遺跡（30）、郷ノ坪遺跡（16）では晩期の土器や石製品が、塙焼鼻遺跡（37）からは土器と石錘が出土している。菅谷洞窟遺跡群（23）も縄文時代の洞窟遺跡と言われているが、詳細は不明である。

弥生時代：サルガ鼻洞窟遺跡、寺ノ脇遺跡、夫手遺跡、権太作遺跡、井尻遺跡、早田遺跡、杉戸遺跡（47）、稲積遺跡（3）では、弥生土器が出土している。夫手遺跡では弥生時代前期から後期前半の土

器が出土している。井尻遺跡では中期後半頃の土器片が、サルガ鼻洞窟遺跡では後期の複合口縁の壺片が見つかっている。

古墳時代：古墳時代には、島根半島の丘陵上やその斜面に古墳や横穴墓が造られている。古墳では、本遺跡の北側に円墳の稻積神社境内古墳（2）が存在するが、詳細な時期はわかつてない。春日山古墳群（40）では、前期後半から中期の古墳7基と土器棺墓を検出している。藤田古墳群（44）は4基からなり、そのうち2基は前期と中期の古墳である。測切古墳群（46）は2基の古墳からなり、前期末から中期の古墳である。藤田古墳、測切古墳のなかには、全長30m前後の前方後円墳が確認されている。堀越古墳群（41）は7基からなる古墳群である。そのなかの7号墳は、出土遺物から後期の古墳とされている。他に後期の古墳としては、片江溝の丘陵に向畠古墳群（9）や丁場古墳群（10）があり、箱式石棺が確認されている。また、善尾古墳（49）や郷ノ坪古墳（17）も後半期の古墳である。中海から日本海に抜ける境水道の北側には、西平古墳群（28）や東平古墳群（26）、女男岩古墳（20）が存在し、石棺や石室の一部を確認しているが、詳細な調査が行われていないこともあり、詳しい時期は不明である。

横穴墓は、後期になると多く造られるようになる。本遺跡の北東側には片江横穴群（6）が存在する。8基確認され、そのうちの6基は羨門部に門状の石組施設を設けている。このような施設は、女男岩横穴群（19）の5基のなかの1基でも確認されている。他に、殿川内横穴群（22）や駒喰横穴（32）、ガンダ横穴群（45）があり、駒喰横穴では土器や人骨が出土している。

古墳や横穴墓以外では、郷ノ坪遺跡や伊屋谷遺跡（11）から製塩土器が出土している。郷ノ坪遺跡では、5世紀後半から6世紀後半の土器と一緒に脚台式の製塩土器が出土している。一方、伊屋谷遺跡では7世紀前半から8世紀頃の須恵器と一緒に、脚部が棒状になった製塩土器が出土している。他に立袋遺跡（51）では、出土遺物から中期頃に營まれた掘立柱建物跡が検出されている。

古代（奈良・平安時代）：この時代の遺跡としては、尾崎遺跡（52）、井尻遺跡、蕨峰遺跡（55）があげられる。尾崎遺跡では礎盤建物や礎石建物が検出され、「郷長」・^{とのいえ}「門家」と書かれた墨書き土器が出土したことから、戸江剣との関連性が推定されている。蕨峰遺跡や井尻遺跡では、甕や壺などの須恵器片が見つかっている。他に、下宇部尾条里制遺跡（36）や長海条里制遺跡（43）で条里が確認されている。

奈良時代に編纂された『出雲国風土記』において、本遺跡周辺は、嶋根郡の方結郷に属している。『出雲国風土記』のなかで、本遺跡の北側に位置する榎上浜（現在の稻積）について、「百姓の家あり」と記載されている。のことから、当該期に集落が存在していたことがわかる。

中世：戦国時代に入ると島根半島にも尼子、毛利の合戦に伴う山城が築かれ、鈴垂山城跡（18）、権現山城跡（24）、忠山城跡（50）の名前がみえる。これらの山城は、外江ノ瀬戸や中江ノ瀬戸と呼ばれていた現在の境水道や、日本海を眺望できる場所に位置し、海上路の監視や守備に適していたものと思われる。忠山城跡は、尼子再興軍が毛利軍を攻略する際の重要な拠点であったところである。権現山城跡は、毛利元就が富田城への補給路を遮断するために築いたものであるが、その後尼子氏がこの城を奪い、秋上庵介を居城させている。鈴垂山城跡は、尼子の重臣である龟井能登守安綱の居城で

あった。当該期において、島根半島の北岸や南岸で制海権をめぐる戦いが、山野や海上で行われていたのは確かである。

祓峰遺跡や閑谷遺跡（54）は中世の製鉄遺跡である。鉄滓やふいごの羽口などが出土しているが、少量の鉄滓であり、詳細な時期は不明である。

集落の遺構としては、立ヶ袋遺跡で中世以降の掘立柱建物跡1棟が検出されている。

近世：松江美保関往還（53）は島根半島南岸を通る街道であり、近世において整備されている。春日山古墳群では掘立柱建物跡が2棟検出され、出土遺物から近世の建物跡と考えられている。

【参考文献】

島根県教育委員会・中国電力株式会社 2009『尾崎遺跡』

島根県古代文化センター・島根県教育厅理藏文化財調査センター 2009『サルガ森洞窟遺跡・椎現山洞窟遺跡』

山本清 島根県教育委員会 1967「美保関町サルガ森・椎現山洞窟住居跡について」『島根県文化財調査報告書 第三集』

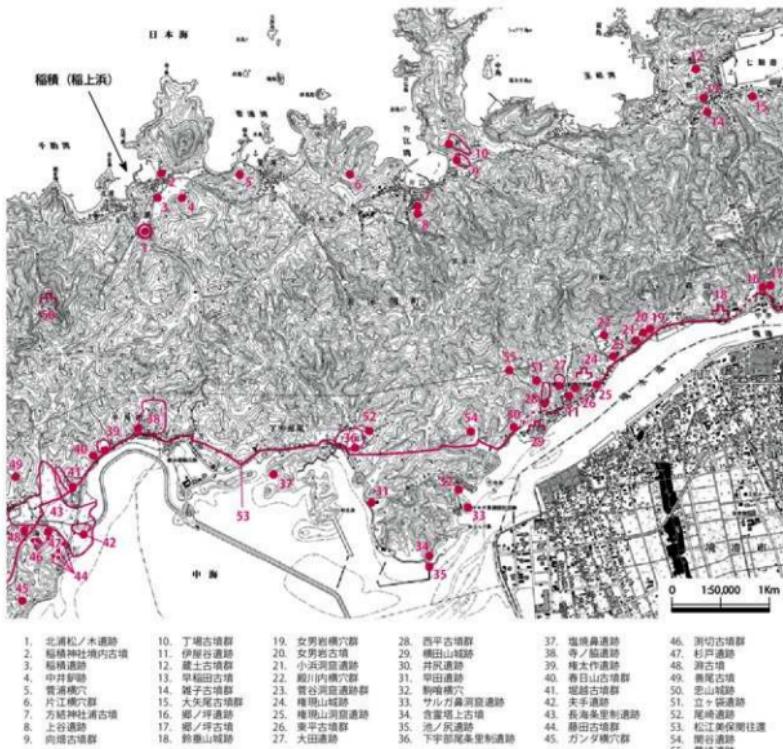
松本岩雄 本庄地区町内連合会・本庄公民館 1994「原始から古代へ」「郷土誌 ふるさと本庄」

松江市教育委員会・財団法人松江市教育文化振興事業団 2000『大手遺跡』

松江市教育委員会・財団法人松江市文化振興事業団 2009『春日山古墳群・寺ノ脇遺跡』

美保関町・美保関町誌編纂委員会 1986『美保関町誌』上巻

森山公民館 1986『もりやま』(創刊号)



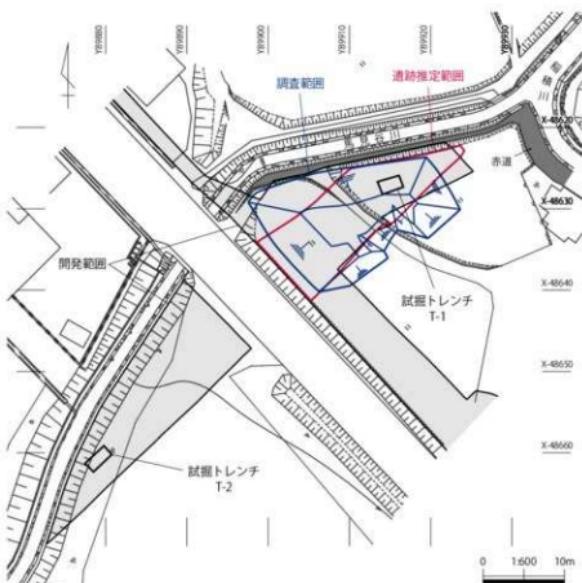
第2図 周辺の遺跡分布図 (S=1:50,000)

第3章 調査の方法

1. 試掘調査（第3・4図）

遺跡の有無を確認するため設定した2箇所の試掘トレンチ(T-1・2)について、その概要を述べる。

T-1は、本調査地北東側に設定したトレンチである。底面近くで炭化物を多く含む土層を確認し、その土層から縄文土器、石器、黒曜石の剥片、堅果類などが出土している。この土層は、本調査において、土層断面27層（第4章・第2節基本層序、第6図参考）に比定すると考



第3図 調査範囲図 (S=1:600)

えられた。地山面を地表面下2.3mで検出しているが、遺構は確認していない。

T-2は、県道より南側に設定したトレンチである。以前水田であったところに盛土を行い、現況はゲートボール場として利用されている。地表面下2.5mまで掘削を行ったが、造成土が厚く盛られており、T-1で検出された包含層の深さまで掘削することができなかった。

第4図にT-1から出土した遺物を掲載している。土器はすべて縄文土器である。1は深鉢の頸部である。頸部まで円形意匠の区画文を描いている。沈線内に二枚貝条痕や縄文がみられる。縄文時代中期末、北白川C式によく似ている。2は外面に撫糸文がみられ、撫りがあまく、バラついているのがわかる。3は外面に巻貝条痕を、内面に二枚貝条痕を施す。外面に円形の竹管文を施し、中期末と思われる。4は磨消縄文の破片で、後期初頭と思われる。5は外面に二枚貝条痕の地文を施す。2本の沈線文が描かれ、うち1本は波状文である。2本の沈線の間には縄文がみられる。内面は巻貝条痕による調整を行っている。中期末である。6はやや凹底の底部で、底径6.4cmを測る。7は頁岩製と思われる黒色の石斧である。基部や先端の一部を欠いている。残存長6.2cm、最大幅5.3cm、最大厚1.9cmを測る。

2. 調査範囲（第3図）

遺跡の範囲は、開発範囲総面積 9679.48 m² の内、167.1 m² である。調査区は、南東側 26.2 m、北西側 14.8 m、幅は約 8 m を測る。この調査範囲について松江市教育委員会と協議を行い、遺跡南西側に隣接する現在併用中の県道については、安全面を考慮し、県道法面下より 1.5 m の緩衝地帯を設けた。試掘調査結果からすると、地表面下約 2.3 m まで掘削することとなり、遺跡推定範囲の上端から勾配をつけて掘り下げていけば、この範囲では地山面まで調査できない可能性が考えられた。このことを踏まえた結果、開発範囲の外側から掘削を開始する方法で調査を行うこととなつた。それにより第3図に示す調査範囲を設定した。調査範囲の面積は 256.0 m² である。



第4図 試掘トレンチ出土遺物実測図 (S=1:3)

3. 本調査の方法（第3図）

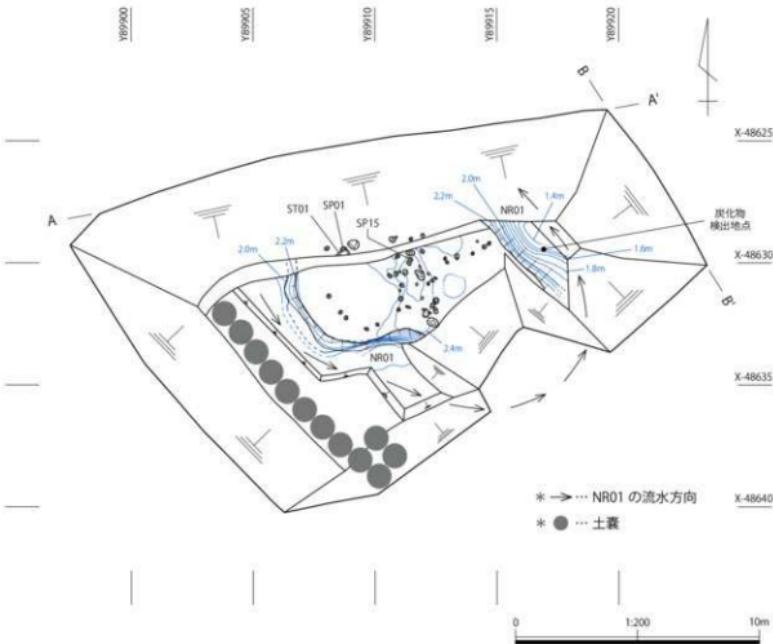
試掘調査結果に基づいて、地表面下 1.5 m までは重機で除去した。これより深い層については手作業で掘削を行ったが、湧水が多く、特に調査区南西側において多いことから、県道側法面の安全面を考慮し、1 t 土糞を置いて作業を進めた。排水溝の掘削と同時に土層観察を行い、その後、遺物包含層の掘削、遺構面の検出、遺構掘削等を行った。

測量はトータルステーションを用い、その図化測量図と遺構を照合しながら平面図をおこし、レベルを記入した。方位については、世界測地系に準拠した座標北を基準としている。また、遺物の取り上げについてもトータルステーションとレベルを併用している。土層断面はレベルを用いて手作業で測量を行い、土色の注記は新版標準土色帖を使用した。また、写真はフィルムカメラによる 35mm のモノクロ、35mm のリバーサル、デジタル一眼レフカメラを主に使用し、120mm スライドフィルムカメラを援用して撮影した。

第4章 調査の成果

第1節 調査の概要（第5図）

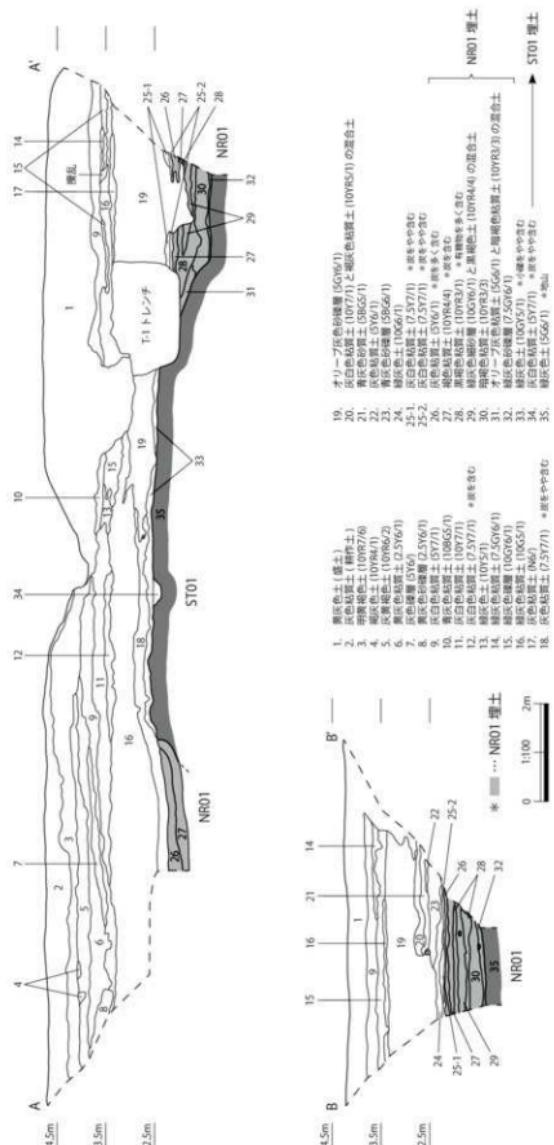
現地表面標高は、約4.7mである。掘り下げていくと、調査区中央部、標高約2.5mで遺構が確認された。調査区中央部では、地山面上に柱穴群や墓壙（ST01）が認められたが、調査区の南西側と北東側では地山面が落ち込んでいる状況が看取された。北東側の落ち込み部分の上層を除去したところ、炭化物の集中する範囲があり、その周辺より繩文土器や石製品が出土したことから、生活面が存在していたものと考えられた。落ち込み部分を掘り下げるに、最終的にこの落ち込みは蛇行する自然流路（NR01）と判断された。以下、基本層序と検出された遺構、遺物について記述する。



第5図 遺構全体図 (S=1:200)

第2節 基本層序（第6図）

土層断面1層は河川改修工事の際の盛土、2層は水田の耕作土である。調査の結果、1～25層、33層は無遺物層と確認された。3～25層は、灰色や緑灰色を呈する粘質土と、青灰色や緑灰色の砂礫層が互層状に堆積していた。そのなかの16～18層は、粘質土の粒子が細かく、粘性も強いことから、



第6図 調査区土層断面図 (S=1:100)

ある程度の時間をかけ、ゆっくりと堆積した土層と思われる。一方、8、19層等の砂礫層には10cm程の礫が含まれ、速い水の流れと共に堆積したものと思われる。

26層から32層は、自然流路(NR01)の埋土である。NR01の土層については第3節、NR01で詳述するが、上層に灰白色粘質土、中層に褐色や黒褐色の粘質土、下層に粘質土や砂礫層を確認し、遺物は縄文時代中期後葉から後期初頭の土器、石製品、動物遺存体、堅果類が多く出土している。先述した生活面は、27層(褐色粘質土)上面で検出している。この面は、現況では湧水が多く、土層も軟らかいことから、生活面として機能していたと想像もできないが、一定時期においては火を使用できるような乾いた場所であったと推測される。この生活面は、調査区中央部よりやや低く、生活面として使用しなくなった後、その上面に26層が堆積したものである。土層観察から、25、26層が堆積した後、河川の氾濫によって19層が流れ込み、一部の堆積土(25~29層)が削られたと思われる。

33層は、調査区中央部の地山面上に堆積した土層で、ST01や柱穴の覆土である。小礫を含み、上層である19層の影響を受けたものと思われる。遺物は出土していない。

これらのことから、縄文時代には現況と異なる場所に小河川(NR01)が存在し、縄文時代中期後葉から後期初頭に埋没した。その後、粘質土や砂礫層が互層状に堆積していき、現況のような田畠となったと推測される。

第3節 遺構と遺物

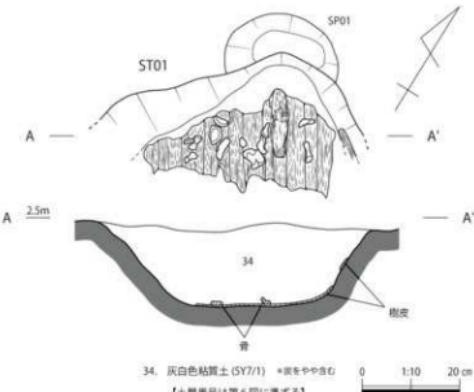
今回の調査で検出したST01、柱穴群、NR01について順次報告する。

1. ST01(第7図、写真1、図版5)

ST01は調査区北西端で検出した墓壙である。地山面で検出し、現況で南西~北東53cm、北西~南東30cm、深さ15cmを測る。墓壙は北側のSP01を掘り込んでおり、SP01が古、ST01が新である。

墓壙内からは、縄文土器の細片(図版5)と人骨(写真1、図版5・H-1~6)が出土している。人骨はヒトの足先の一部で、親指の末節骨(H-6)や中足骨(H-4)、脛骨(H-2)、腓骨(H-1)などである。周辺において腰から上の骨は出土していないが、両足のみを埋葬したとは考えにくく、全身を埋葬した墓壙の南側大半が削平を受け、足の一部の骨しか残っていない状況と思われる(第5章・第2節参照)。検出した地山面も北側から南側に向かって凹んでおり、このことからも削平された可能性が考えられる。

また、墓壙の底面と北東側壁面の



第7図 ST01 実測図(S=1:10)

一部には、厚さ1cm程度の樹皮片が認められた。樹皮片は、底面には敷いたように、壁面には貼り付けたようになっていることから、遺体を納める際に意図的に置かれたものと考えられる。

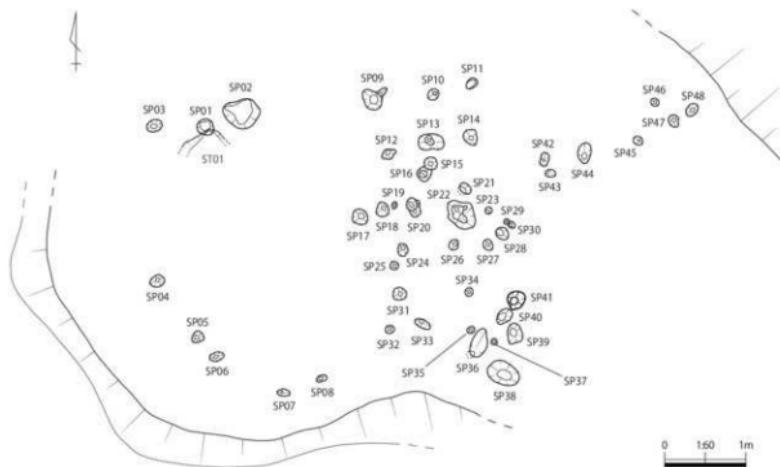
この樹皮片の年代測定では、補正 $\delta^{13}\text{C}$ 年代で約4000年前、曆年較正年代で約4500～4600年前との結果が得られ（第5章・第1節参照）、縄文時代中期末から後期初頭の墓壙と考えられた。



写真1 ST01出土人骨

2. 柱穴群（第8・9図、表1、図版5）

調査区中央部から48個の柱穴を確認している。規模は、上端径が8～48cm、深さが3～33cm、検出面標高が2.4～2.5mを測る。全体的に小さくて浅いものが多く、33層や19層が堆積する際に削平された可能性が考えられる。個々の柱穴の規模については表1に記載している。柱穴内の埋土は、炭を含む灰白色粘質土であり、柱痕や柱は検出していない。これらの柱穴については建物跡が想定されるが、焼土や炭の集中部分が確認されていないことから、復元出来る根拠に乏しい。建物跡の検討

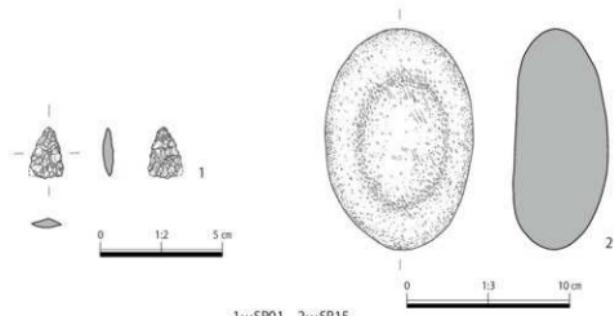


第8図 柱穴群実測図 (S=1:60)

については、第7章の総括で記述する。

柱穴内から出土した遺物は少なく、SP01から縄文土器の細片（図版5の1点のみ）、石鎌、骨（図版5・H-7）が、SP15から磨石が出土している。縄文土器は、外面の調整痕から後期の可能性が考えられるが、明確な時期は不明である。⁽¹⁾

第9図-1は黒曜石製の石鎌である。長さ2.1cm、最大幅1.3cmを測り、一部を僅かに欠いている。平基式である。2は磨石で、長さ13.6cm、最大幅9.1cmを測る。表面はやや凹み、僅かに擦痕が認められる。



第9図 柱穴群出土遺物実測図 (S=1:2,1:3)

表1 柱穴群一覧表

遺物名	日遺物名	規 横 (cm)			出 土 遺 物
		長軸	短軸	厚さ	
SP01	SP11	22	20	29	縄文土器、石鎌 (黒曜石製)
SP02	SP13	48	39	33	
SP03	SP12	20	16	25	
SP04	SP07	17	14	14	
SP05	SP06	16	15	7	
SP06	SP05	15	11	7	
SP07	-	16	9	13	
SP08	-	14	8	12	
SP09	SP14	33	28	40	
SP10	SP16	13	11	18	
SP11	SP17	14	10	21	
SP12	-	21	9	11	
SP13	-	33	20	21	
SP14	-	19	17	20	
SP15	SP08	*15	-	16	磨石
SP16	SP09	18	15	15	
SP17	-	20	18	14	
SP18	-	22	21	17	
SP19	-	9	8	3	
SP20	SP04	24	18	20	
SP21	-	34	11	17	
SP22	-	42	32	19	
SP23	-	*8	-	15	
SP24	-	15	13	17	

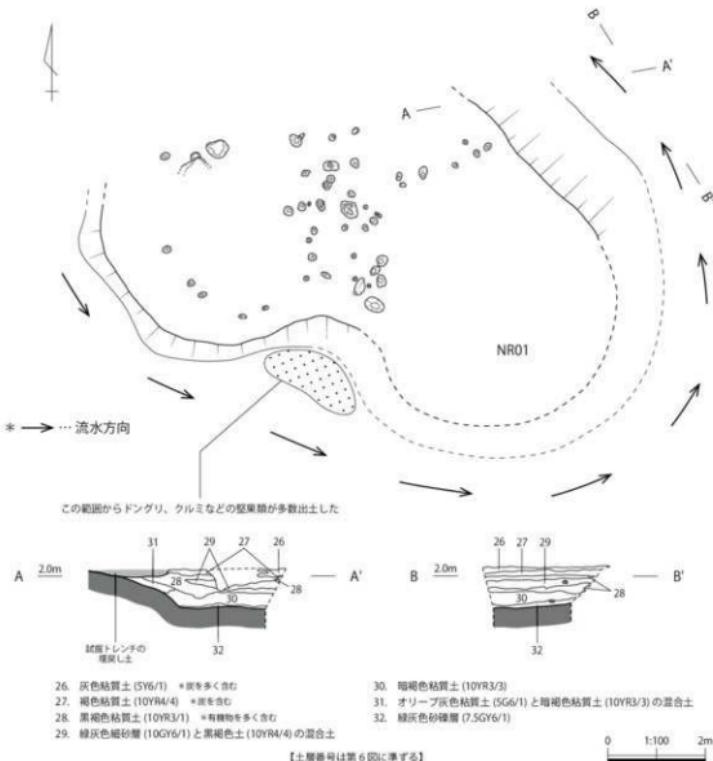
遺物名	日遺物名	規 横 (cm)			出 土 遺 物
		長軸	短軸	厚さ	
SP25	-	*10	-	7	
SP26	-	12	10	6	
SP27	-	12	11	11	
SP28	-	17	14	21	
SP29	-	17	-	4	
SP30	-	10	8	12	
SP31	-	16	15	16	
SP32	-	10	8	5	
SP33	-	20	10	18	
SP34	-	10	8	11	
SP35	-	*8	-	11	
SP36	-	37	21	20	
SP37	-	*7	-	8	
SP38	SP10	41	28	29	
SP39	-	24	20	20	
SP40	-	22	16	12	
SP41	-	24	22	13	
SP42	-	14	10	10	
SP43	-	13	8	12	
SP44	-	27	17	10	
SP45	-	12	11	6	
SP46	-	*9	-	3	
SP47	-	16	15	11	
SP48	-	16	11	11	

3. NR01（第10図）

NR01は調査区南西側と北東側で検出した自然流路であり、土層堆積状況が同じであることから、蛇行する同一の流路と判断した。流路の片側しか検出してないため、流路幅は不明である。検出面標高は、南西側の一番高いところで2.45m、北東側で2.13mを測る。また、底面標高は南西側で2.1m、北東側で1.37mを測り、北東側に向かって傾斜していることから、流水は南西側から北東側に向かって流れていたものと考えられる。

土層断面35層の地山が基盤とし、粘質土や有機質を多く含む埋土（26～32層）が確認された。26層～31層は遺物包含層、32層は無遺物層である。また、先述したように、27層上面では生活面を検出している。

NR01から出土した縄文土器は、縄文時代中期後葉から後期初頭に限られ、その総点数は684点である。他に、石製品や黒曜石、堅果類、獸骨等が出土している。



第10図 NR01実測図 (S=1:100)

石製品は、敲石、磨石、石皿等があり、総点数は38点である。敲石や磨石が多く、石皿のなかには表面が変色したものがみられた。また、黒曜石では、石鏃、UF、RF、SC、石核、楔形石器等があり、その中には原石も含まれていた。

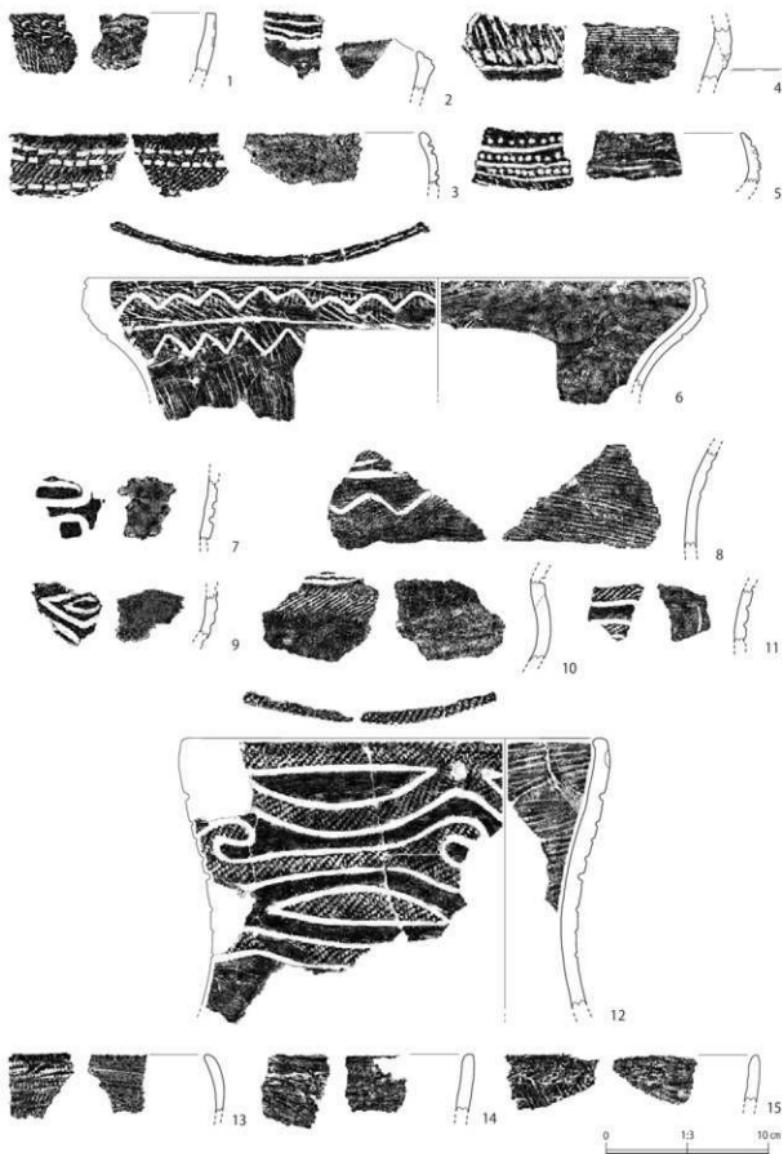
また、骨も多く出土している（第5章・第2節、図版10参照）。獸骨としては、イノシシ、ニホンジカが多く、他にタヌキやアナグマ、ニホンザルの骨も少数だが含まれていた。獸骨には、解体痕や小動物に喰まれた痕跡も確認された。魚骨も多く、マダイやサメ、スズキ、マグロの骨が出土している。なかでも注目されるのは、マグロの椎骨（H-24・25）である。椎体の径が約4～5cm、長さは約3.7～4.7cmを測り、復元体長は1mを超える大きなマグロであった。他に、鳥類ウ科の骨や、アザラシまたはアシカの海生哺乳類と思われる骨も見つかっている。

堅果類は、トチノミ、ドングリ、クルミである。

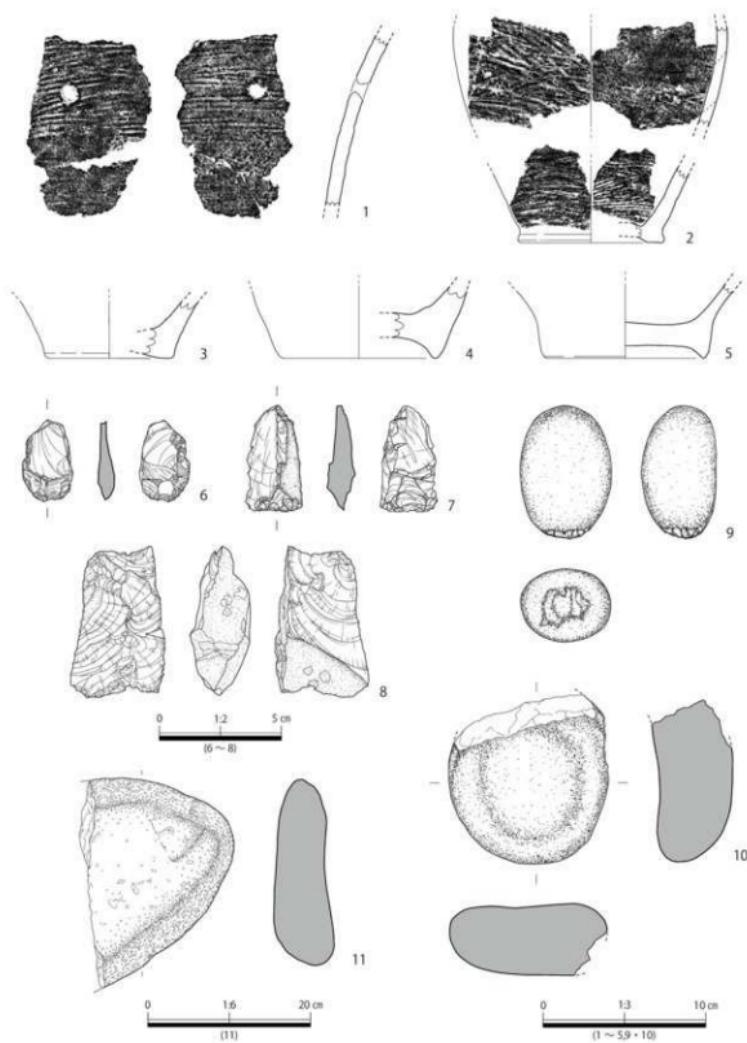
以下、層位毎に出土した遺物について詳述するが、32層は無遺物層であるため割愛する。

（1）26層出土遺物（第11・12図）

26層は、炭を含む灰色粘質土で、粘性が高い。土層の厚さはないが、多くの遺物が出土している。第11図-1～10は中期後葉から中期末の土器で、1・5は里木II・III式、それ以外は中期末である。1は口縁部で、外面に半截竹管による刺突文が横走している。外面の地文は撚糸文で、場所によって方向を変えており、端部にも施している。内面はナデである。2は波状口縁の口縁部である。口縁端部に2条の沈線文を描いている。内外面の調整はナデである。3は押引沈線文によって長方形区画文を描く。地文は繩文である。4は外面に斜行沈線文を描き、その下に巻貝殻頂部による刺突文を施している。地文は二枚貝条痕であり、場所によってナデを併用している。5は3本の横走沈線文と刺突文を交互に3段配した口縁部である。外面下側に撚糸文が確認される。内面には巻貝条痕とナデをしている。6はキャリバー形口縁の深鉢である。地文は撚糸文で、口縁部と頸部で施文方向を変えている。また、口縁端部にも撚糸文を施している。口頸部に巻貝殻頂部による直線文を挟んで2段の波状文を描いている。内面調整はナデである。7は巻貝殻頂部による方形の区画文を2列以上描いている。また、その右側にも沈線文が認められ、何らかのモチーフと思われる。8はやや外反する深鉢の頸部である。波状文の上側に2本の沈線文を描き、上方の沈線文は途切れている。外面には節の小さな繩文や二枚貝条痕がみられ、一部にナデを併用している。内面には二枚貝条痕を施している。9は沈線で、菱形状の文様を描いている。10は深鉢の胴頸部である。破片の上端に2本の沈線文を描き、その下に繩文を施している。また、繩文の下側にはナデの痕跡が僅かに認められる。11・12は後期初頭、九日田式⁽²⁾の土器である。11は磨消繩文の破片である。12は口頸部がやや長く、頸部の屈曲が弱いものである。文様は、基本的には磨消繩文で描かれているが、一筆書きになっていない部分がある。口縁端部に近いところに三日月状の区画文と凹点文がみられ、九日田式のなかでも古段階と考えられる。内面は二枚貝条痕で調整している。13～15は無文の口縁部である。13はやや内湾し、外面に複節繩文、内面に巻貝条痕を施す。14は外面に巻貝条痕、内面に巻貝条痕とナデを施している。15は外面が巻貝条痕、内面はケズリである。



第11図 NR01-26層出土遺物実測図① (S=1:3)



第12図 NR01-26層出土遺物実測図② (S=1:2,1:3,1:6)

第12図・1は深鉢の頭部と思われる。直径1.2cmの穴が穿たれ、内外面共に二枚貝条痕とナデを施している。2は深鉢の胴部下半から底部である。底径8.8cmを測る。内外面に巻貝条痕やナデを施す。3～5は底部である。底径は、3が7.4cm、4が9.4cm、5が9.7cmを測り、凹底を呈する。調整はすべ

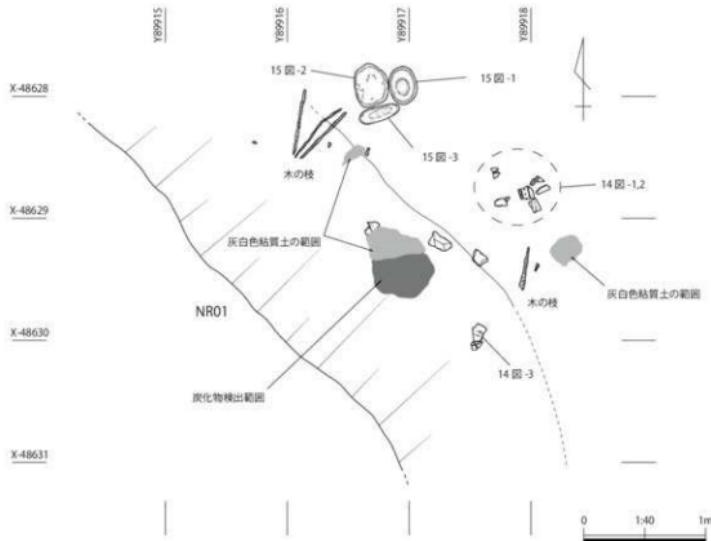
てナデである。

6～8は黒曜石である。6は横長剥片の周囲を折断し、石器の未製品である。7は対面に剥離痕がみられる剥片で、一部に原礫面がみられる。8は長径約6cm、最大幅3.4cm、厚さ2.5cmの角礫状の板状原石である。

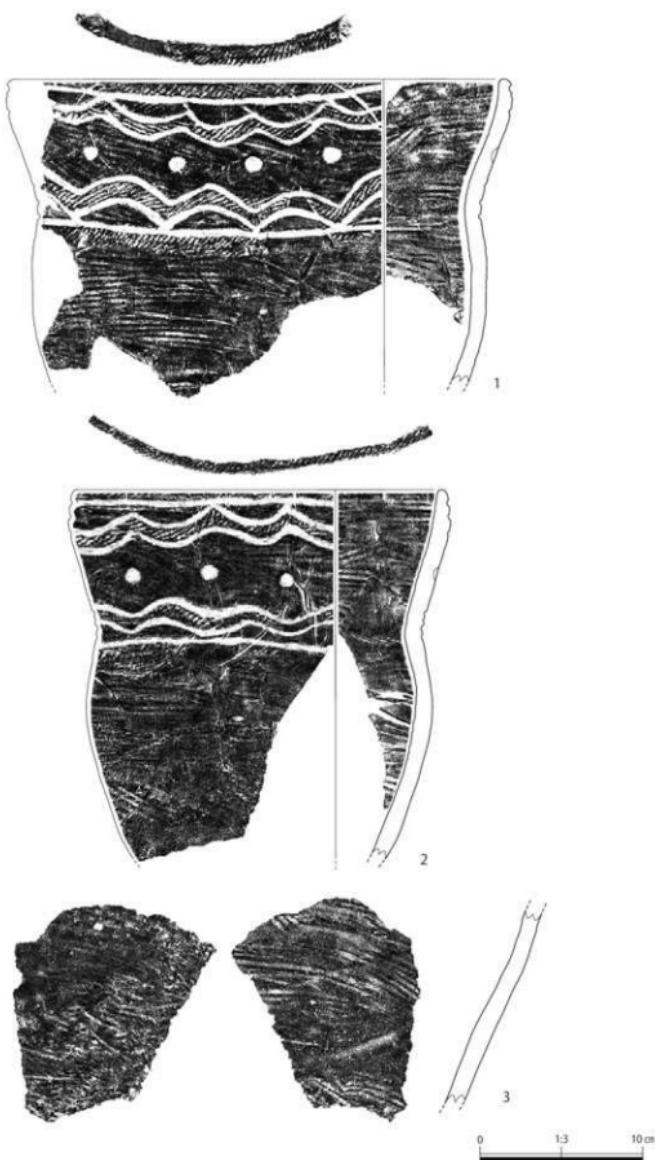
9～11は石製品である。9は敲石である。厚みのある椭円礫を素材とし、下端に敲打痕が認められる。10は一部が欠損する磨石である。表面に浅い凹みが認められる。11は石皿である。約半分を欠いている。現況で長径25.8cm、短径19.0cm、厚さ7.3cmを測る。縁近くから中央にかけて浅く凹み、表面は滑らかである。

(2) 27層上面検出状況・出土遺物(第13・14・15図)

26層掘削後、27層上面から炭化物が集中する範囲を検出し、その周辺から縄文土器、石製品、獸骨等が出土している。炭化物の集中するところが屋内または屋外であるかは、現状では判断できないため生活面とした。炭化物について、AMS年代測定において補正δ¹³C年代が約4000年前、曆年較正年代が約4500～4600年前という結果が得られている。炭化物の近くには灰白色の粘性の高い土のようなものが確認されているが、それについては不明である。出土した土器は縄文時代後期初頭の深鉢である。縄文時代の年代観については定説が確立されていないが、年代測定結果と整合的である。他に、この面からイノシシやアナグマの骨、シカの臼歯、鹿角、クロダイの上顎骨等が出土してい



第13図 NR01-27層上面検出状況図 (S=1:40)

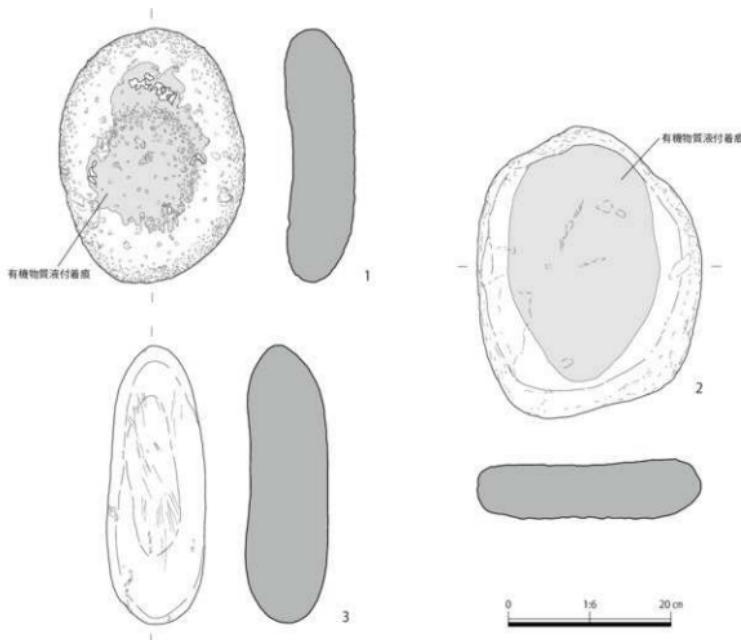


第14図 NR01-27層上面出土遺物実測図① (S=1:3)

る（図版7・H-9～13）。鹿角は全体的に焼けて黒色を呈するが、先端の一部に研磨痕が観察される。また、骨の中には全長1.6cmで先端を先細りに加工したと思われるもの（H-9）があり、骨を目的に応じて加工、利用していたようである。

第14図は、27層上面から出土した遺物である。1・2は深鉢である。1は口径30cm、残存高18.6cmを測る。口頸部が長く、頸部の屈曲がやや弱いものである。口頸部に横走する縄文帯に挟まれて対向する波状意匠が描かれ、その中に凹点文が配されている。最下部の縄文帯は磨消縄文になっていることから、後期初頭（九日田式成立期）と思われる。内外面の器面調整は二枚貝条痕である。2は口径22.4cm、残存高22.7cmを測る。文様や器面調整が1と同じであり、同一個体の可能性が高い。3は深鉢の胴部下半である。内外面に二枚貝条痕を施している。

第15図は、石製品である。1・2は石皿である。1は長さ31.3cm、最大幅22.9cm、厚さ7.7cmを測る。表面はやや凹み、褐色に変色している。動植物の有機物質液が付着した痕跡と思われる。2は扁平な楕円礫を利用したもので、長さ36.0cm、最大幅27.6cm、厚さ7.3cmを測る。表面は僅かに凹み、滑らかである。2の表面も1と同様に変色し、動植物の有機物質液付着痕がみられる。3は楕円礫を素材とする磨石である。長さ34.4cm、最大幅12.0cm、厚さ10.1cmを測る。表面はやや凹み、滑らかである。磨き面として使用した擦痕が確認される。



第15図 NR01-27層上面出土遺物実測図② (S=1:6)

(3) 27層出土遺物（第16図）

27層は褐色粘質土で、有機物を含んでいた。土層内からは、縄文時代中期中葉の型式である船元式によく似た縄文地がみられる土器や、中期後葉から中期末の土器が出土している。

第16図-1～5は中期後葉・里木II・III式の土器である。1は里木II・III式古段階の特徴をもつ破片である。地文は撚糸文で、細い半截竹管による小さな波状文や、平行する沈線文を描いている。2は口縁端部の一部が突起状？を呈する口縁部である。外面に縦方向の、内面に横方向の巻貝条痕を施す。3は破片の下半に2本の沈線文を描く。破片の上半には僅かに撚糸文の痕跡がみられる。4は外面に刺突文、内面にナデを施す破片である。5は半截した竹管状の工具による爪形文2列の刺突文で、連弧状の意匠を描いている。外面の地文は撚糸文で、内面の調整はナデである。6～8は地文に楕円形に近い大きめの節がみられ、中期前葉の船元式によく似た縄文が認められる破片である。内面の調整はナデや巻貝条痕、二枚貝条痕である。9は無文の深鉢である。内外面に巻貝条痕とナデを施している。10は底径4.0cmを測る凹底の底部である。

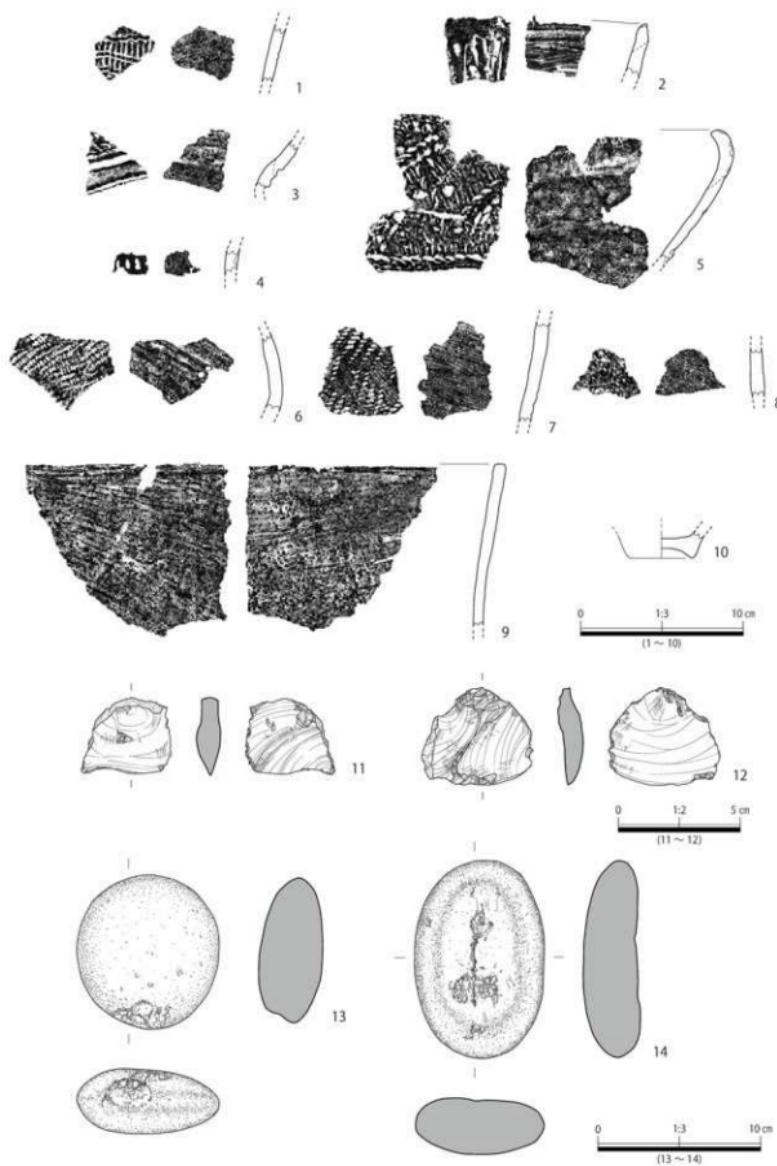
11・12は黒曜石である。11は左側縁に微細剝離痕がみられるUFである。12は下端部にノッチ状の二次加工痕が見えるRFである。

13は敲石である。下端に敲打痕がみられる。14は表面が浅く凹み、敲打痕がみられる。中央には縦方向に溝状の敲打痕が認められる。他に、縦方向や斜め方向に擦痕が僅かに確認され、磨石として使用されていたものと考えられる。

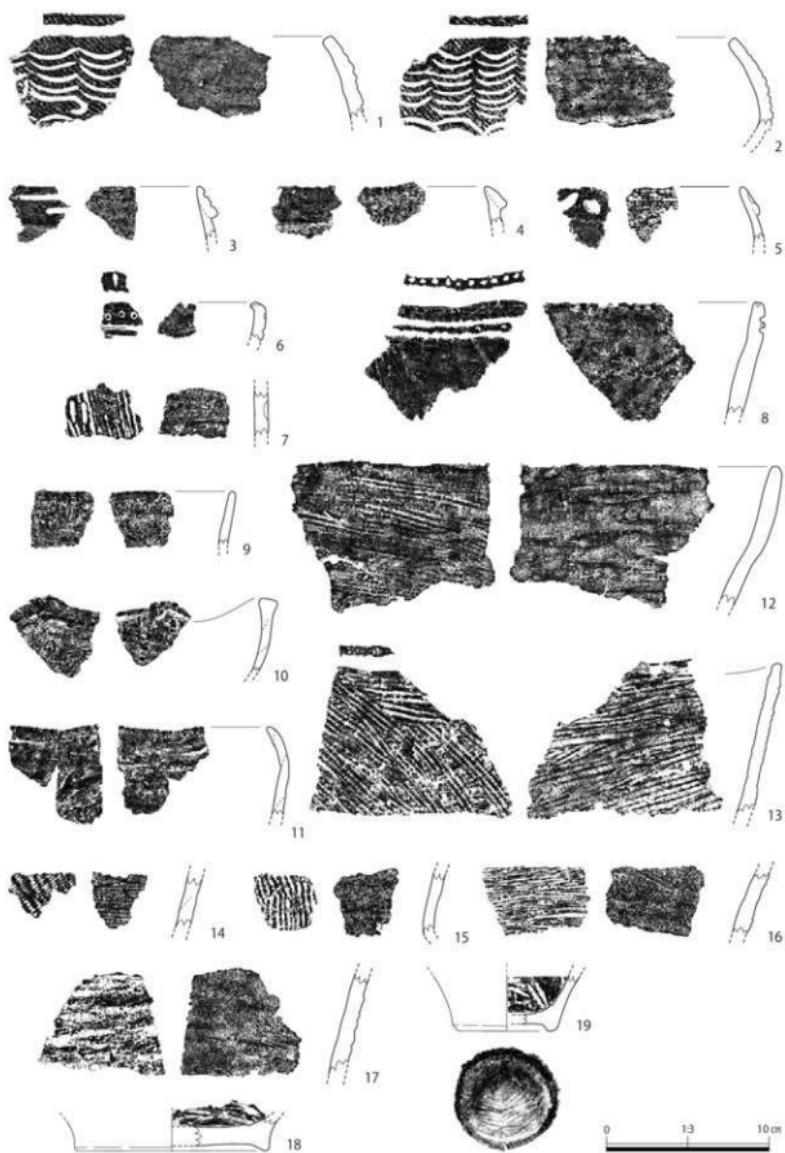
(4) 28層出土遺物（第17・18図）

28層は、黒褐色粘質土である。この土層から土器片が一番多く出土している。有機物を多く含み、腐葉土が土壤化したような土層である。堅果類は他の土層からも出土しているが、この土層が一番多かった。特に、流路南西側の一部（第10図のドットで示した部分）において多く確認している。この部分は流路において、水流の影響を受けにくい、いわゆる瀧みのような場所であり、その場所に多くの堅果類がみられたものと思われる。

第17図-1・2はキャリバー形の口縁を呈する深鉢で、外面に波長の短い重連弧文を描いている。細かな節の縄文を地文とし、口縁端部にも施している。1・2は同一個体の破片と思われる。中期末の古段階、北白川C式に似ている。3～5は口縁部と頸部の境界が段状に肥厚するもので、中期末、矢部奥田式に類似するものである。3は肥厚部に2本の沈線文がみられ、うち1本は途切れている。5は肥厚部に円形や楕円状の刺突文が施されている。6はやや内湾する口縁部が端部で僅かに内側に屈曲するものである。外面に巻貝殻頂部による刺突文と沈線文を、口縁端部に刺突文を施している。7は地文に巻貝条痕を施し、縦方向に楕円形状の刺突文をしている。8は2本の沈線文の間に巻貝殻頂部による刺突文を施す。口縁端部にも刺突文がみられる。器面調整は内外面にナデをしているが、外の一部に巻貝条痕が認められる。この土器の胎土には、キラキラしてみえる角閃石が含まれていた。6～8は中期末と思われる。9～13は無文の鉢である。9は内外面にナデを施す口縁部である。10は波状口縁を呈し、端部を平坦にしている。11はやや内湾する口縁部である。12の深鉢は、外面に二枚



第16図 NR01-27層出土遺物実測図 (S=1:2, 1:3)

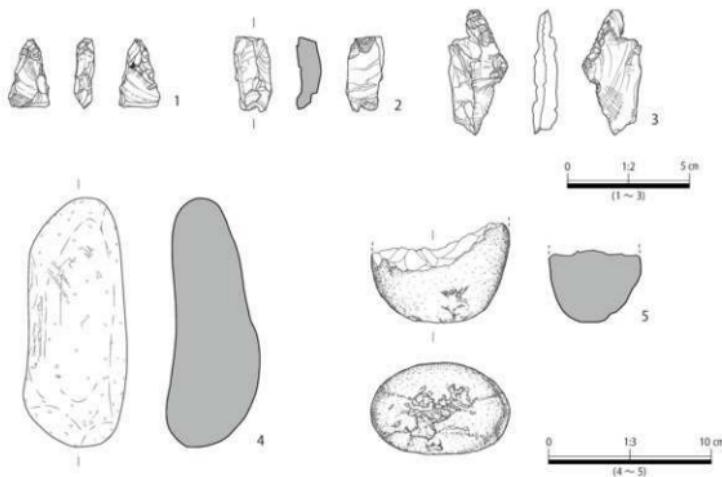


第17図 NR01-28層出土遺物実測図① (S=1:3)

貝条痕、内面にナデとケズリを施している。13の深鉢は、内外面に二枚貝条痕を施している。また、口縁端部に二枚貝放射肋による圧痕がみられる。14は外面に丸みをおびた縄文、内面に巻貝条痕をしている。15の外面には撫糸文、16には細かい巻貝条痕、17にはナデを施している。18・19は凹底の底部である。ヘラ状工具による調整痕が認められる。

第18図-1～3は黒曜石である。1はRFである。打点部付近に二次加工痕が認められ、石鎚の未製品と思われる。2は石核である。3はSCである。三角形状を呈し、剥片の右側縁から打点部にかけて刃部がみられる。

4は楕円礫を素材とする磨石である。表面は凹み、滑らかである。部分的に擦痕が認められる。5は敲石で、器体の半分程度を失っている。下端側に敲打痕がみられる。

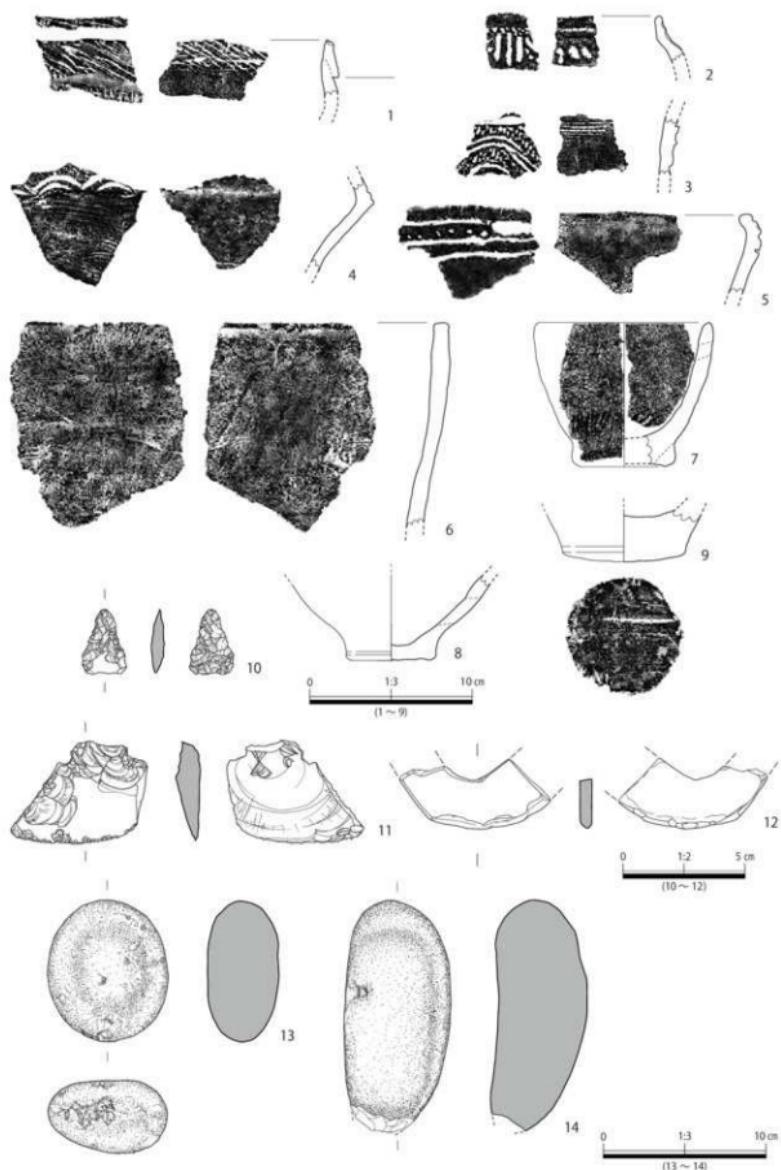


第18図 NR01-28層出土遺物実測図③ (S=1:2,1:3)

(5) 29層出土遺物（第19図）

29層は、緑灰色細砂層と黒褐色土の混合土である。この土層は28層堆積後、北東側から28層を割り込むように流れ込み、レンズ状にみられる。これは28層が軟らかく、その間に細砂層がゆっくりとした水の流れと共に流れ込んだものと考えられる。この土層からも中期後葉から中期末の土器が出土している。

第19図-1・2は中期後葉の土器である。1は口縁部を肥厚させ、口頸部の境界を段状にしたものである。撫糸文を外面や口縁端部、内面上半に施している。2は折り返しの口縁部である。縦位3本の沈線の両側に斜め方向の沈線文を描き、その一部に刺突文を施している。また、その上側にも不整形な刺突文がみられる。3は連続した蛇行文を描くと思われる破片である。地文は複節の縄文で、内面は二枚貝条痕とナデで調整している。4はキャリバー形口縁を呈する口頸部である。口縁部の地文は



第19図 NR01-29層出土遺物実測図 (S=1:2, 1:3)

縄文で、重連弧文がみられる。頸部の調整には巻貝条痕とナデをしている。この土器片は、28層出土の第17図-1・2と同一タイプのものと思われる。5はやや内湾する口縁部である。3本の沈線文を描き、上側2本の沈線文の間に刺突文を施している。3～5は中期末、北白川C式に類似している。6は無文の深鉢である。調整の大半はナデであり、一部に巻貝条痕がみられる。7は口径10.5cm、高さ8.9cm、底径5.4cmを測る小さな鉢である。ナデや巻貝条痕で器面調整し、底部はやや凹底である。8は底部から胴部に向かって「ハ」の字状に開く底部である。9は底径7.3cmを測る。外面に横方向の調整痕がみられる。

10・11は黒曜石である。10は石鎌であるが、未製品の可能性が考えられる。11はUFである。側縁に微細剥離痕と二次加工痕が認められる。

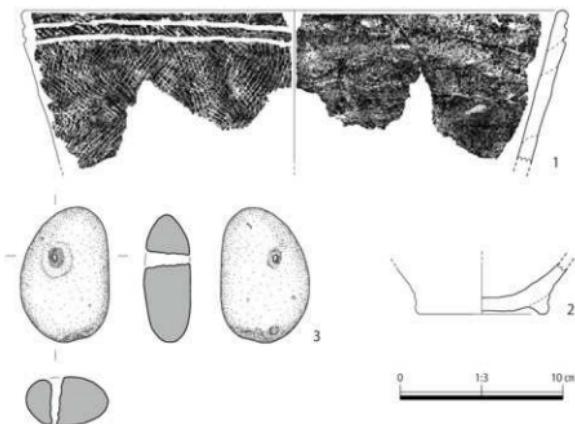
12は黒色頁岩の石製品である。大半が欠損し、側縁に僅かに加工痕がみられる。原形や用途は不明である。13は敲石である。下側に敲打痕が認められる。14は楕円形の礫を素材とする磨石で、一部を欠いている。表面は凹み、非常に滑らかである。

(6) 30層出土遺物（第20図）

30層の暗褐色粘質土は、流路底面近くに20～25cmの厚さで堆積した土層である。他の土層より厚く堆積している割に出土遺物は少ない。

第20図-1は直線的な口縁を呈する深鉢である。2本の押引文を描いている。地文には撚糸文がみられるが、文様からすると里木II・III式新段階以降のものと考えられる。2は底径7.8cmを測る底部である。

3は楕円形の石製品である。片面からロート状に穴を穿ち、紐などを通して使用されたと推測される。



第20図 NR01-30層出土遺物実測図 (S=1:3)

(7) 31層出土遺物（第21図）

31層は、流路北東側壁面にみられる土層である。中期末の土器が出土しているが、量的には他の土層より少ない傾向がみられる。

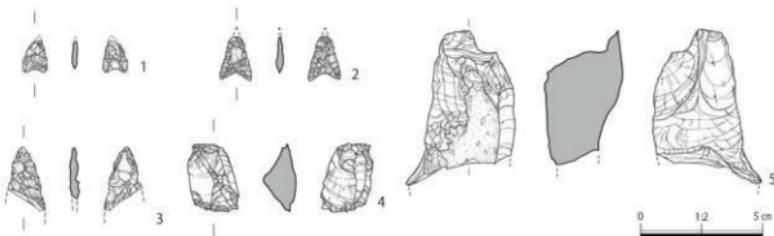
第21図-1～3は中期末の土器である。1は内湾する口縁部で、半截竹管による刺突文を施している。外面の地文は撚糸文で、内面には巻貝条痕とナデ調整を行っている。2は押引文による弧状のモチーフを描いていると思われる破片である。3は繩文地に波長の短い重連弧文を描く破片である。第17図-1・2、第19図-4と同じ器形と思われる。4は底径7.2cmを測る凹底の底部である。内面に工具による調整痕がみられる。



第21図 NR01-31層出土遺物実測図 (S=1:3)

(8) 埋土（出土土層不明）出土遺物（第22図）

第22図は掘削土中から採取した黒曜石で、出土土層は不明である。1～3は石鏃である。1は残存長1.2cmで、先端を僅かに欠いている。抉りの浅い四基式である。2も四基式の石鏃で、先端を欠き、残存長1.8cmを測る。3は基部の一方を欠損している。残存長2.7cmである。4は楔形石器である。両端部につぶれが認められる。5は方柱状の亜角砾原石である。長さ6.8cm、幅3.5cm、厚さ3.4cmを測る。下端部が割れ、分割した可能性がある。



第22図 NR01-埋土出土遺物実測図 (S=1:2)

【註】

- (1) 柳浦俊一氏、福田陽介氏に所見して頂き、後期の破片の可能性が考えられるとのご教示を得た。
- (2) 柳浦俊一氏は、「立命館大学考古学論集」山陰中部域における縄文時代後期土器の地域性のなかで、中津式の広域的共通項は「磨消繩文」という施文手法と、「曲線的な文様」という大まかな要素に留るとし、型式を時間・地域（空間）を示す尺度とするなら、山陰中央部域に分布する特徴的な「中津式」は別の形式名を当てる必要がある。代表的な遺跡名を型式名にする通例に従えば、当該期の単純遺跡である九日田遺跡を代表させ、「九日田式」とするのが妥当であるとしておられる。本報告ではこれに準じ、「中津式」を「九日田式」とする。

第5章 自然科学分析

第1節 北浦松ノ木遺跡発掘調査に係るAMS年代測定

渡邊 正巳（文化財調査コンサルタント株式会社）

1. はじめに

北浦松ノ木遺跡は、島根県東部、松江市北東部の美保関町北浦に立地する遺跡である。

本報は、文化財調査コンサルタント株式会社が、公益財団法人松江市スポーツ振興財団の委託を受け、北浦松ノ木遺跡で検出された遺構の年代を明らかにする目的で実施、報告した調査報告書の概報である。

2. 試料について

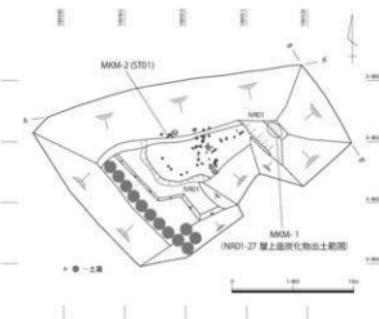
公益財団法人松江市スポーツ振興財団により採取された試料（第23図）から、分析試料の御提供を受けた。表2に分析試料の詳細を示す。MKM-1は、NRO1埋土の27層上面で検出した炭化物である。MKM-2は、ST01（墓壙）の底面から出土した樹皮片である。

3. AMS年代測定分析方法

塩酸による酸洗浄の後に、水酸化ナトリウムによるアルカリ処理、更に再度酸洗浄を行った。この後、二酸化炭素を生成、精製し、グラファイトに調整した。 ^{14}C 濃度の測定にはタンデム型イオン加速器を行い、半減期：5568年で年代計算を行った。曆年較正にはOxCal ver. 4.2.4 (Bronk Ramsey, 2009) を用い、INTCAL13 (Reymer et al., 2013) を利用した。

4. AMS年代測定分析結果

測定結果を表2、第24・25図に示す。表2には、 $\delta^{13}\text{C}$ 値と4種類の年代を示している。補正年代は、 ^{14}C 濃度が環境により変動することから、 $\delta^{13}\text{C}$ を測定し、 $\delta^{13}\text{C} = -25\%$ に規格化した ^{14}C 濃度を求め、リビーの半減期（5568年）を用いて年代値を算出したもの（曆年較正年代）を5年単位で丸めた値で、西暦1950年から遡った年代値で示してある。また、OxCalでの較正計算には、曆年較正用年代を用いている。第24図では、一覧形式で、資料ごとに確率分布と $\sigma \sim 2\sigma$ の校正範囲を示した。



第23図 調査区平面図及び試料採取地点 (S=1:400)

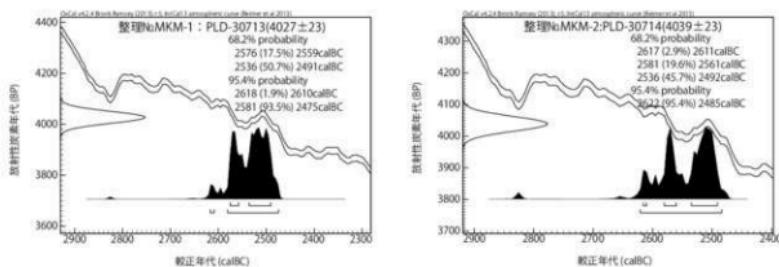
5. 測定年代について

測定した試料からは、何れも縄文時代中期末～後期初頭を示す年代値(4025 ± 25yrBP、4040 ± 25yrBP)が得られた。一方、出土遺物から遺構の時期は縄文時代中期後葉から後期初頭と考えられており、測定結果とほぼ一致した。

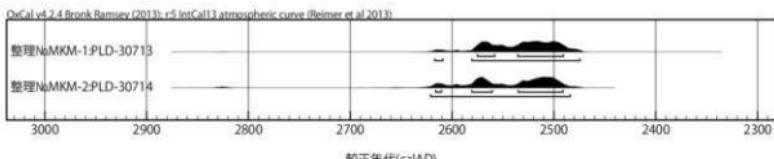
表2 AMS年代測定結果

整理No	種別	出土地点	量(㌘)	前処理		$\delta^{14}\text{C}$ (‰)	測定年代 ^a (yrBP ± 1 σ)	曆年較正年代 (yrBP ± 1 σ)	補正年代 ^b (yrBP ± 1 σ)	曆年較正年代		測定年代 (PLD)
				超音波洗浄	酸・アルカリ・脱水剤(塩酸:±2N, 氷酸化ナトリウム:±0.0N, 硝酸:±2N)					1 σ基年代範囲	2 σ基年代範囲	
MKM-1	灰土	NRG(北側) 褐色粘質土 上面	4.8377	超音波洗浄 酸・アルカリ・脱水剤(塩酸:±2N, 氷酸化ナトリウム:±0.0N, 硝酸:±2N)	-26.87 ± 0.35	4058 ± 22	4037 ± 23	4025 ± 25	BC2576 - 2559(17.5%) BC2536 - 2491(50.7%) BC2581 - 2475(91.5%)	BC2618 - 2610(1.9%) BC2581 - 2475(91.5%)	30713	
MKM-2	削皮灰	ST01 表面の削皮灰	9.9222	超音波洗浄 酸・アルカリ・脱水剤(塩酸:±2N, 氷酸化ナトリウム:±0.0N, 硝酸:±2N)	-27.82 ± 0.33	4086 ± 22	4059 ± 23	4040 ± 25	BC2617 - 2611(2.9%) BC2581 - 2561(19.6%) BC2536 - 2492(45.7%)	BC2622 - 2485(95.4%)	30714	

^a: $\delta^{14}\text{C}$ 補正無年代, ^b: $\delta^{14}\text{C}$ 補正年代



第24図 曆年較正図



第25図 較正年代の分布図

【参考文献】

- Bronk Ramsey, C. (2009). Bayesian analysis of radiocarbon dates. Radiocarbon, 51(1), 337-360.
 Reimer, P.J., Bard, E., Bayliss, A., Beck, J.W., Blackwell, P.G., Bronk Ramsey, C., Buck, C.E., Cheng, H., Edwards, R.L., Friedrich, M., Grootes, P.M., Guilderson, T.P., Hajdas, I., Hatte, C., Heaton, T.J., Hoffmann, D.L., Hogg, A.G., Hughen, K.A., Kaiser, K.F., Kromer, B., Manning, S.W., Niu, M., Reimer, R.W., Richards, D.A., Scott, E.M., Southon, J.R., Staff, R.A., Turney, C.S.M., and van der Plicht, J. (2013) IntCal13 and Marine13 Radiocarbon Age Calibration Curves 0-50,000 Years cal BP. Radiocarbon, 55(4), 1869-1887.

第2節 北浦松ノ木遺跡出土の動物遺存体

石丸恵利子（広島大学総合博物館）

はじめに

北浦松ノ木遺跡は、島根半島東端部の松江市美保関町北浦に所在する。北側に日本海を望み、海岸部から約500m内陸に位置する。自然流路(NRO1)埋土にあたる土層断面26層から31層の各層と、墓壙(STO1)および柱穴(SPO1)から動物遺存体と人骨が出土している。共伴する遺物から、縄文時代中期後葉から後期初頭に相当する遺跡である。資料は、現場にて目視で取り上げられた約240点で、魚類7種、鳥類1種、哺乳類6種の計14種が確認された(表3・4)。以下、出土した動物遺存体の特徴と遺構ごとの特徴について述べ、北浦松ノ木遺跡における動物資源利用について考察する。

動物遺存体の種類

魚類:魚類資料は27点である。最も多く確認されたのはマグロ属の椎骨で、11点を数える。そのほとんどが、椎体の横径が40.0から50.0mmの大きなものである。復元体長が90から95cmの現生標本の椎骨横径は30.0mm前後であることから、1mを超える大型のものであったことがわかる。本遺跡からは複数点のマグロ属椎骨が出土しており、縄文時代の漁撈活動の様相を示す貴重な資料が得られたといえる。サルガ鼻洞窟遺跡(縄文前期から後期)からも出土が報告されている(金子1963)。

次いでタイ科が多く出土している。クロダイ属の前上顎骨、ヘダイの歯骨もしくは前上顎骨、マダイの上後頭骨が、各1点確認された。クロダイ属は体長30cmの現生標本と同大で、マダイは体長35cmの現生標本よりやや大きい個体である。また、個体の大きさにマダイの可能性が高い前上顎骨2点と歯骨1点も確認することができた。その他、前述のタイ科のいずれかのものと考えられる歯骨片と臼歯各1点を含め、計8点のタイ科資料が確認された。

その他の魚種として、エイ・サメ類の椎骨が1点、スズキ属の擬鎖骨が1点、大型のベラ科の上咽頭骨が1点出土している。エイ・サメ類の椎骨は、側面の神経や血管棘の痕跡である窪みは深く明瞭であることから、小型のサメ類のものと考えられる。スズキ属の擬鎖骨は、破片のため正確な復元は難しいが、体長41cmの現生標本より大きな個体であり、50cm程度の大きさであったと推測される。上咽頭骨は約3cmを計り、日本海に生息する大型のベラ科としてはコブダイの可能性が高い。コブダイは、佐太講武貝塚(縄文早期から中期)やサルガ鼻洞窟遺跡からも出土している(内山1995・金子1963)。

鳥類:ウ科の一種のものと考えられる上腕骨が2点出土している。大きさ的には、カワウかウミウに相当する。その他、キジ科と思われる複合仙骨が1点確認されている。

哺乳類:哺乳類資料は204点で、うち、種や部位が特定できた資料は130点を数える。ヒト以外の動物遺存体で最も多く確認されているのはニホンジカで、54点の資料を確認した。鹿角や下顎骨、椎骨、上腕骨、脛骨など、全身にわたる部位が出土しており、狩られた獲物がこの周辺で解体され、利用後に廃棄された状況が窺える。四肢骨端部が未化骨のものは確認できなかったことから、獲得され

た資料はすべて成獣である。

次いでイノシシ資料が27点出土している。歯牙、橈骨や大腿骨などの四肢骨、距骨や踵骨などの四肢骨先端部分など、複数の部位を確認することができた。資料点数はニホンジカの半数であるが、非常に大きな個体が含まれている点が注目され、本遺跡出土資料の特徴の一つとして挙げられる。橈骨の遠位幅(Bd)が42.7mmと47.4mm(図版10・H-30)の個体を確認することができ、ここまで大きな個体の報告はほとんど例がなく貴重である。現生メスの第3後臼歯までがほぼ生え揃った段階の資料の同部位は、Bdが30.5mmの未化骨資料である。また、中国山地にある帝釈峠遺跡群の出土資料において、最も大きな化骨済資料は40mmを少し超えたもので、最も大きな未化骨資料は38mm程度のものが確認されている。本遺跡出土の資料は、とともにオス個体だと考えられる。帝釈峠地域では、イノシシは縄文時代早期から前期に大型化し、中期以降は時代とともに小さくなっているとされ(藤田・河村1997)、島根半島において、中期後葉から後期初頭の段階で非常に大型な個体が生息していたことが指摘できる。

その他、アナグマの尺骨や脛骨など3点、ニホンザルの上腕骨1点、海生哺乳類の下顎骨1点が出土している。アナグマもしくはタヌキ大の中型哺乳類の上顎犬歯や下顎骨片も確認されている。海生哺乳類の下顎骨は、歯が抜け落ちた下顎体部分のみであったため、種の特定には至らなかった。今後、現生標本との比較が必要であるため明言は避けるが、アザラシかオットセイの可能性がある。

また、ヒトの距骨、踵骨、中足骨など足先の部位が35点確認されている。1点以外すべてSTO1からまとまって出土しており、舟状骨や末節骨、種子骨などの小さな部位も確認することができる残存状態の良好な資料である。土井ヶ浜遺跡・人類学ミュージアムの大藪氏により、踵骨の大きさなどから男性の可能性が高いこと、病的な痕跡や切断された痕跡などはないことが指摘されている。⁽³⁾

遺構ごとの特徴

骨類の出土は、STO1(墓壙)、SPO1(柱穴)、NRO1(自然流路)に分けられる。

STO1:ヒトの足先の部位が確認された遺構で、その他にはヘダイの歯骨もしくは前上顎骨の破片が1点確認されている。ヒト資料には切断された痕跡がないことや、踵骨や距骨に接続する腓骨の遠位とその先の部位が確認されていること、左右ともに出土していることなどから、埋葬された人骨で、後に墓壙の一部は削平されて消失したが、足先部分のみが原位置を留めたまま残されたものだと考えられる。本遺構以外のNRO1から出土している大腿骨の近位部から骨幹部の破片は、その時に削平された土壤に含まれていた同一個体のものではないかと推測される。今後、年代測定や同位体分析することによって、遺構の年代や当時のヒトの食生態を明らかに出来ると期待される良好な資料である。

SPO1:埋土にはニホンジカの距骨片が1点、マガキもしくはイワガキと考えられる貝殻資料が4点含まれていた。カキ類はいずれも全体的に褐色を呈し、表面は脆いが、非常に硬く重量感のある状態である。いずれも殻長40mm前後で、殻高83mmを測るものが1点存在する。貝類は本資料以外に確認されておらず、島根半島の日本海に面した地域で、当時獲得することができた貝類の証拠を示す貴重な資料だといえる。

NR01: 自然流路で多くの資料が確認され、魚類、鳥類、哺乳類の3種すべてがここから出土している。当時利用した動物資源の残滓が投棄されたものだと考えられる。イノシシとニホンジカの距骨には、やや浅め幅広の切削が複数確認され、イノシシとニホンザルの上腕骨の遠位やニホンジカの肩甲骨にも刃物の痕跡を確認することができた。毛皮や肉を骨から分離したり、関節を外す際に石器によって付けられた解体痕だと考えられる。ニホンジカの肩甲骨には、噛まれたような痘瘍状の痕跡を観察することができた。

また、人為的に加工を施した骨や鹿角がいくつか出土している。一端に穿孔を施し吊り下げる利用したと考えられるもの、一端を先細りにした針程度の刺突状のものなどが確認されている。素材の部位等は特定できないが、四肢骨などの骨を加工したものだと考えられる。鹿角は全体的に焼けて黒色を呈するが、先端部に研磨した痕跡が観察でき、当該時期に何らかの目的で使用されていたものだと考えられる。多様な動物種が確認されていることや、解体痕などの人為的な痕跡が観察できることから、周辺地域で獲得した動物資源を解体調理し、骨や角は加工し道具として利用しながら暮らしていた様相が読み取れる。

まとめ

本遺跡資料によって明らかにされた当時の動物資源利用の特徴として、以下の3点が挙げられる。1点目は、縄文時代中期後葉から後期初頭の島根半島東端日本海側地域での動物資源利用の様相が明らかになったことである。本地域で、少量ながらヒト以外の13種の多様な動物利用を確認でき、海洋資源と陸資源ともに利用している状況を読み取ることが出来た。今後周辺地域との比較において、有益な情報が得られたといえる。2点目は、マグロ属椎骨の複数出土である。マグロ属の出土については、サルガ鼻洞窟遺跡での出土例と並んで、当地域において利用することが出来た海産資源の種類や漁撈技術を知るうえで興味深い資料である。海生哺乳類の出土も注目に値する。3点目は、大型イノシシの出土である。これまでほとんど報告例のない大型のイノシシが確認されたことは特筆すべき点で、当地域において豊かな陸資源を得ることが出来たことを示しているといえる。また、本遺跡から出土している石鏃などの狩猟具の考察を深めるうえでも、重要な意味を持つ資料である。

以上のように、特徴ある動物遺存体の出土によって、遺跡周辺の当時の動物相、またそれらを獲得した技術や季節などを考察するうえで、非常に興味深い資料が得られたといえる。

(注) ヒト資料の部位同定と所見については、土井ケ浜遺跡・人類学ミュージアムの大藏由美子氏にご教示頂いた。記して、感謝申し上げる。その後、石丸が情報を補足して一覧表にまとめた。

【参考文献】

- 阿部永・石井信夫・伊藤徹魯・金子之史・前田喜四雄・三浦慎悟・米田政明 2008 『日本の哺乳類』改訂2版 東海大学出版会
- 石丸恵利子 2016 (予定) 「徳島城下町跡(徳島町1丁目地点)の動物資源利用—出土骨類の考察—」『徳島城下町跡(徳島町1丁目地点)発掘調査報告書』財団法人徳島県埋蔵文化財センター
- 宇田川龍男 2006 「原色新鳥類検索図鑑」森岡弘之編修 二隆館
- 内山純蔵 1995 「出土動物・植物遺存体」佐太講・貝塚発掘調査報告書2「島根県鹿島町教育委員会」pp.25-31.
- 金子浩昌 1963 「美保湾・中ノ海の石器時代漁撈 烏根県崎ヶ鼻洞窟出土の魚類骨」『考古学研究』10-1, pp.38-41.
- 中坊徹次編 2013 『日本產魚類検索 全種の同定』第三版 東海大学出版会
- 藤田正勝・河村善也 1997 「帝釈峡遺跡群における後期更新世～完新世の中・大型哺乳類の大きさの変化(予報)」『広島大学文学部帝釈峡遺跡群発掘調査室年報XII』広島大学文学部帝釈峡遺跡群発掘調査室, pp.143-154.

3 動物遺存研究

表 4 動物遺存標名一覽表	目	分類地圖	遺物名稱	說明
雀形類	雀形類	Lundbyhagen 同前	Danskens	瑞典 1-2 Pre-Laconian

第6章 考察

山陰地方中部域における縄文時代中期後葉～後期初頭土器の変遷

—北浦松ノ木遺跡出土縄文土器の意義—

柳浦 俊一（島根県教育庁埋蔵文化財調査センター）

はじめに

北浦松ノ木遺跡では、縄文時代中期後葉から後期初頭にかけての土器が出土した。一瞥したところ、中期後葉から中期末古段階にかけてと、やや時間を置いて後期最初頭のまとまりが認められる。既存の型式では、中期が里木II・III式（間壁 1971・矢野 1993）、北白川C式（泉 1985）または矢部奥田式（矢野 1994）、後期が中津式（鎌木・高橋 1975）または九日田式（柳浦 2003）である。

山陰地方中部域では、中期後葉から中期末のまとまった資料がなく、実態がつかみにくい時期である。北浦松ノ木遺跡はまさにこの時期に相当し、当地の様相に曙光を与えたものとなった。本稿では、これらの土器についての位置付けを考えたうえで、山陰地方中部域の該期土器を概観しておく。

後期初頭・九日田式は、比較的出土例が多い。しかしながら、その成立過程は明らかにされておらず、その後の展開も明確に説明されたとは言い難い。本稿後段では、九日田式の成立と展開について再考してみたい。

1. 山陰地方中部域の中期後葉～中期末の土器編年（第26～30図）

撚糸文土器の時期：北浦松ノ木遺跡では、里木II・III式新段階から中期末古段階に相当するものがあり（第26図-1～9）、この間に遺跡の主体的な時期と考えられるが、最も特徴的なのは撚糸文土器である。撚糸文土器はかつて里木II式の指標とされた（間壁 1971）が、間壁が分類基準とした撚糸文と条痕文（間壁の里木III式）はかなりの部分が時間的に重複するとされた（泉 1988a・矢野 1993）。矢野は文様の変化を重視し、里木II式と同III式をまとめて「里木II・III式古段階・中段階・新段階」と呼んでいる（矢野 1993、第26図-10～13）。ただし、撚糸文については、泉、矢野ともに里木II・III式中段階に収まると考えているようである。

北浦松ノ木遺跡では撚糸文土器が多数出土しているが、里木II・III式古段階に遡るものは1点のみ（第16図-1）である。地文以外の文様をみると、これ以外の土器が里木II・III式古・中段階主体とは考えにくく、地文としての撚糸文が里木II・III式中段階以降に残存している可能性が考えられる。

第26図-2～7は撚糸文が施された土器である。3は横走沈線文と刺突文を交互に3段配した土器で、これは同・新段階の特徴といえる。7は直線文を挟んで2段の波状文が描かれている。同様な波状文は、第26図-12・13など地文を持たない土器や、第29図-8のように地文が縄文に転化した土器に例があり、幡中光輔は「里木II・III式系統土器群」と呼んで中期末古段階（北白川C式古段階併行）に位置付けている（幡中 2012）。大ぶりな波状文は、里木II・III式古・中段階の連孤文（第26図-10）に祖形が求められ、同・新段階で波状文に転化するという（矢野 1993、第26図-11～13）。

山陰地方中部域で波状文が主体的な文様をなすのは、中期末古段階と思われる（幡中 2012）。

第 26 図-5 は押引文、4 は刺突文が横走、6 は刺突文で連弧状の意匠を描いている。押引文は、里木貝塚で里木Ⅲ式とされた土器（間壁 1971）や北白川 C 式（泉 1985）にあり、里木Ⅱ・Ⅲ式中段階にはみられないようである。3～6 は撚糸文を地文とするものの、やはり同・新段階以降とするのが妥当であろう。

なお、この他に地文が撚糸文でありながら里木Ⅱ・Ⅲ式新段階以降の文様を持つものは、貝谷遺跡（第 28 図-12）に類例がある（島根県教委 2002）。対向する波状意匠の間に渦巻き文を埋め込む文様は、中期末の文様意匠である。

里木Ⅱ・Ⅲ式の特徴の一つとして、折り返し口縁がある（第 26 図-1）。北浦松ノ木遺跡では、複数の折り返し口縁土器が出土しているが、一例（第 26 図-2）を除いては地文がない。2 は内外面に撚糸文が施されるが、折り返し口縁の形状は平板で、形骸化が著しい形状である。

器形の面では、3・6・7 がキャリバー形口縁の形状を維持しているが、里木Ⅱ・Ⅲ式古・中段階（10）に比べて矮小化している印象はぬぐえない。3・6 などの口縁形態は同・新段階の形状、7 は中期末古段階に近い形状と思われる。

5 は直口の器形である。口頸部の屈曲が弱い直口器形は、従来の里木Ⅱ・Ⅲ式の編年表では新段階以降に登場する器形である（泉 1988a の第 6 様式など）。これまでの研究を参考にすると、直口器形が当地で他の地域に先んじて出現するというより、撚糸文が他の地域より後まで残存すると考えた方が矛盾が少ないようと思われる。

以上のように、北浦松ノ木遺跡では撚糸文土器が多数出土しているものの、文様や器形などからは里木Ⅱ・Ⅲ式中段階以前に遡らせるることは難しいと思われる。このことは、山陰中部域で撚糸文が里木Ⅱ・Ⅲ式新段階以後まで残存する可能性を示唆している。当地では、間壁 1971 で里木Ⅲ式とされた条痕文土器はきわめて少なく、里木Ⅱ・Ⅲ式から中期末に至る地文の変遷は、瀬戸内地方とは違った過程をたどったと考えたい。

北浦松ノ木遺跡の縄文土器をみる限りでは、当地での中期後葉から中期末の地文変遷過程は以下の 2 案が想定される。

- ① (A) 撥糸文 → (B) 撥糸文+地文なし → (C) 地文なし+縄文
- ② (a) 撥糸文 → (b) 撥糸文+地文なし+縄文

両案とも、撚糸文が主体とする時期（=里木Ⅱ・Ⅲ式古・中段階）を先行させるが、①・②案の違いは、その後に撚糸文と縄文が同時に存在するのかどうかの違いである。この点についてはさらに良好な資料が求められるが、北浦松ノ木遺跡での出土状況をみると、②案を支持したくなる。その場合、②案 (b) は里木Ⅱ・Ⅲ式新段階となり、縄文の登場が遡ることになる。また、北白川 C 式が中期末に置かれるので、②案では従来の編年觀と矛盾が生じることになる。兵庫県熊野部遺跡のように、当地でも里木Ⅱ・Ⅲ式新段階に縄文が波及している可能性も考えられる。一方、型式学的には①案でこの矛盾が解消されているが、これを支持するような資料は今のところない。

以上をまとめると、北浦松ノ木遺跡の撚糸文土器は、里木Ⅱ・Ⅲ式新段階以降まで残存する可能性

が考えられる。しかし、7の波状文が、中期末古段階とした第29図-8とよく似た文様とはいえ、撚糸文を中期末段階まで下げることには躊躇する。とりあえず、撚糸文の当地での下限は里木II・III式新段階としておく。



第26図 北浦松ノ木遺跡の撚糸文土器他（1～9）と里木II・III式中段階（10）・新段階（11～13）

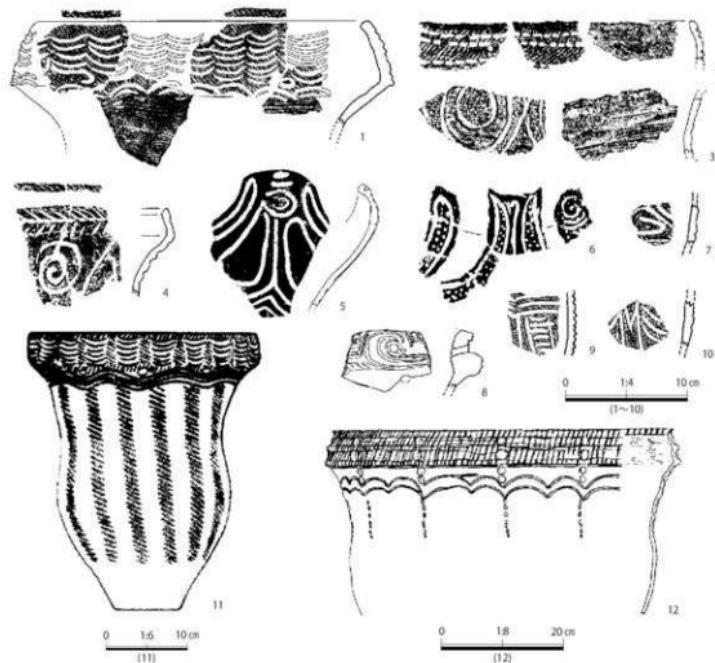
北白川C式の流入：第27図-1～3は、近畿地方に分布する中期末・北白川C式によく似た土器である。3は中期末新段階まで下る可能性も否定できないが、他は中期末古段階と捉えることができよう。

第27図-1は、近畿地方中期末の北白川C式A4類（泉1985）のうち、かつて星田式と呼ばれたもの（第27図-11）に文様・器形ともによく似ている。波長の短い重連孤文などは星田式の影響が強いと思われるが、頸胴部に垂下する帶縄文が施されていないことから、在地化した土器と考えられる。

2は押引き状沈線文によって長方形区画文を描く土器、3は横位に連結した円形意匠の土器で、これも北白川C式によく似ている。3は内外面に二枚貝条痕がみられること、文様が頭部にまで拡大している点などは、在地化といえるかもしれない。

北白川C式は、桂見遺跡（鳥取市教委 1978）、栗谷遺跡（福部村教委 1990）など鳥取県東部でまとめて出土しているが、鳥取県西部以西では主体的に出土することはない。中期末の山陰地方中部域は、北白川C式の分布圏から外れており、この時期には第29図-7～9のような在地の土器が主体となっていたと考えられる（幡中 2012）。

当地の北白川C式（第27図-4～10・12）は散発的な出土である。これらに著しく変容したものはなく、祖形の特徴を維持している。一方、山陰地方中部域の中期末土器は在地的に展開しており、北白川C式の影響が大きいとは言い難い。北白川C式は波状的、貫入的に波及したようである。山陰地方中部域の中期末土器は、在地土器に北白川C式が少數混じるという状況が考えられる。



第27図 北浦松ノ木遺跡（1～3）と山陰地方中部域の北白川C式（4～10・12、11は星田式模式図）

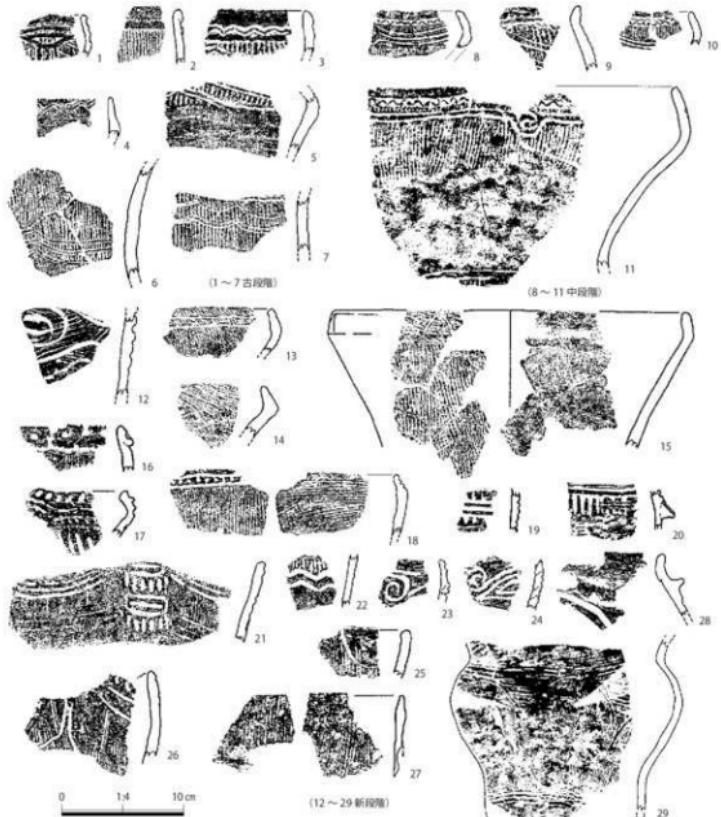
2. 中期後葉～中期末の編年案（第28・29・30図）

以上を踏まえ、山陰地方中部域の中期後葉から中期末の土器編年を示しておく。現状ではまとまった資料に恵まれていないので、矢野 1993・1994、富井 2005、幡中 2012などを参考にまとめた。

里木II・III式古段階（第28図-1～7）：キャリバー形口縁の器形で、地文燃系文に半截竹管工具による小波状文（3・4）、連弧文（5～7）をこの段階の指標とした。地文以外の文様は、口縁部と頸部に

集中する。地文の撚糸文は、頸部以下まで整然と縱走するもの(6・7)や、口縁部のみ施文し頸部を無文とするもの(5)がある。1・2には撚糸文施文後に細隆線文が貼り付けられ、1には細隆線文に連弧文が取り付いている。

里木II・III式中段階 (第28図-8~11): キャリバー形口縁を維持し、半截竹管による小波状文が交互刺突文に変化し、連弧文施文具が半截竹管状工具からヘラ状工具に変わったものをこの段階の指標とした。地文は撚糸文が多いが、条痕文のもの(10)が少數混じるようである。交互刺突文の下位は、8~10には連弧文、11には横走沈線文が施される。8の左端、11の右端近くには、連弧文、横走沈線文から連続して渦巻き文が描かれている。



第28図 山陰地方中部域の里木II・III式

里木II・III式新段階（第28図-12～29）：矢野1993では、里木II・III式新段階の特徴を、交互刺突文（8～11）が刺突文と沈線文に分離し、沈線文間に刺突文が施される（18）ことや、沈線上に刺突文が施される（19・20）ことを指標としている。沈線文はヘラで描かれ、文様は大ぶりになる。地文は、条痕文あるいは無地文とする研究者が多い。

16～22は、矢野1993で里木II・III式新段階とされたものに近い土器である。16・18・21は地文に条痕文、17は頸部に条痕文の代替と思われる縦位の沈線文がみられる。22は波状文の上方に条痕文が施され、装飾的効果を上げている。

12～15は地文に撫糸文を持つ土器である。12は2本単位の対向波状文間に、渦巻きまたは梢円意匠を埋め込んでいる。13は2条の横走沈線文、15は鋸歯状文が口縁部に描かれている。13～15は口縁部が「く」字形に屈曲する器形で、15は浅鉢の可能性もあるが、全形が復元できるほど大きな破片ではない。

23・24は、幡中2012で中期末古段階とされた土器である。ここに描かれた渦巻き文は、里木II・III式古段階以来の渦巻き文の形状を留めていることから、この段階と考えた。

25～27は垂下する条痕文を地文とする土器である。間壁1971で里木III式とされた地文条痕文土器は、当地では極めて少なく、25～27のような土器がこれに相当するかもしれない。25・26は大ぶりな連弧文が描かれている。器形はいずれも直口器形に近く、時期が下る可能性もある。

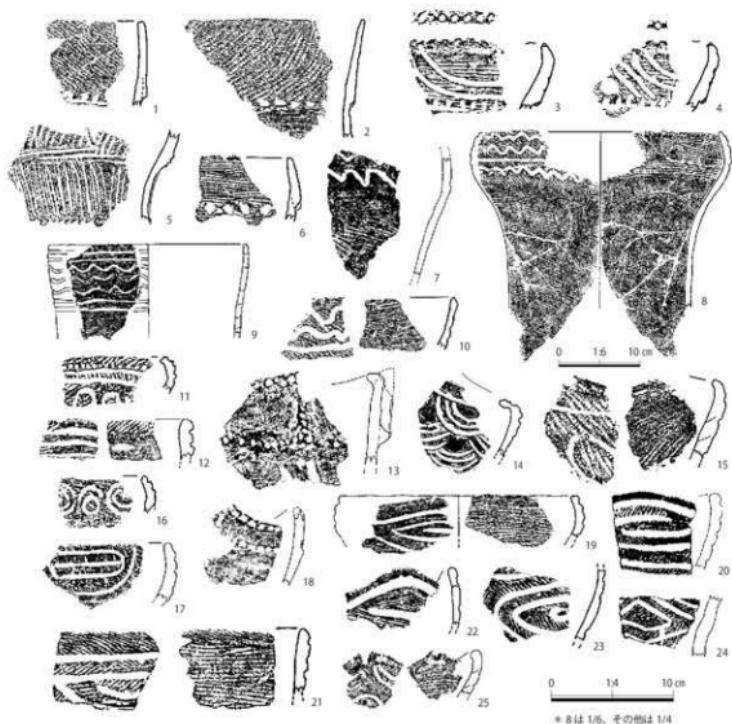
28・29は口縁部が直立して胴部が球形に張る器形で、図だけで比較すると、東海地方の呪煙・醍醐式に近い器形（例えば泉1988bの807）のように見える。ただし、文様は当地の文様で、器形のみ模倣されたと思われる。28に大ぶりな円形文あるいは下弦の連弧文、29に大ぶりな下弦の連弧文と撫糸文が施されている。29は半截竹管工具による連弧文が描かれるが、文様が大ぶりなこと、撫糸文が限定的であることから、この段階と考えた。28はヘラ状工具による施文である。

中期末古段階（第29図）：矢部奥田式に類似（1～4・6）または変容したもの（5・13）、波状文（7～10）や横走沈線文（12）が描かれるものの、区画文など単位文様が描かれるもの（14～25）のうち、磨消繩文化が進んでいないものを抽出した。繩文が施されるものが散見される（1・2・5・8・10～12・15・17・20・21・23～25）が、繩文は口縁部全面に施され、沈線文と一体化していない。

14・17は里木II・III式の連弧文の末裔と考えられ、21は17がさらに変容したものであろう。19・20は波状文から派生したと考えられ、23・24は19の変容と思われる。15・21・23～25は九日田式に近い文様を持つので、時期が下る可能性もある。

中期末新段階（第30図）：磨消繩文化が進んだものを中心に集めた。区画内または沈線間に繩文を納める方向が認められるもの（3～10）の、描線が完全に一筆書きでないもの（4・9・10）、交錯するもの（17）などがあり、磨消繩文は完成されていない。1・2は口頸部や胴部に広く繩文が施され、地文は古段階の様相であるが、文様が円形またはJ字意匠を描いていることからこの段階と考えた。5・6は三日月状区画文が2段に配される土器で、里木II・III式の連弧文から派生したと思われる。4・9は区画内を埋めるような沈線文があり、10は渦巻き文の末端が途切れたまま終息している。

1・9・14～16は頸部が強く屈曲する器形で、九日田式の祖形となる器形である。14・15は波状文

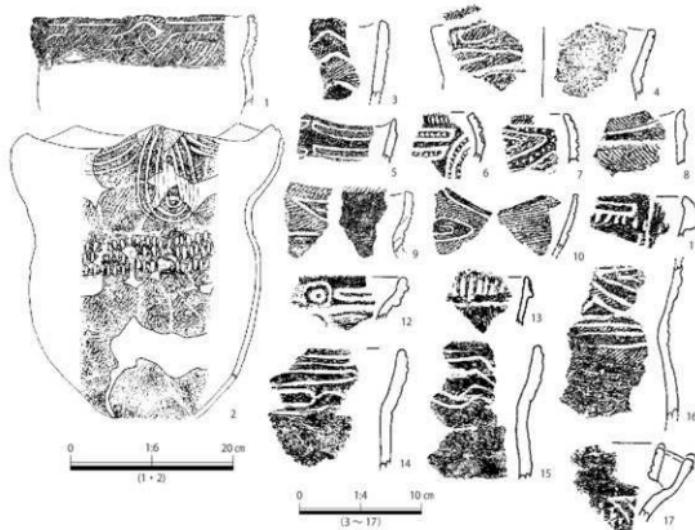


第29図 山陰地方中部域の中期末古段階

に似た文様で古相が窺えるが、三井II遺跡で17などとともに出土していることから、この段階と考えた。

11～13は口縁部が肥厚する土器である。11・12は頸部以下に文様が展開するようである。同様な土器は、岡山県長手遺跡竪穴住居2・同3で、中期末新段階の土器とともに出土している（岡山県教委2005）。

山陰地方中部域の中期後葉から末にかけての土器編年は、おおむね以上のような推移をしたと考えられる。この時期の土器は断片的なものが多く、当地の主体的に存在した土器群が明確にしえないが、船元式から里木II・III式中段階までは概略瀬戸内地方と同じ動向、これ以後は里木II・III式を母体とした在地的な土器群が主に分布していたように思われる。その中に、北白川C式や矢部奥田式が客体的に混じる状況が、当地のあり方ではなかろうか。



第30図 山陰地方中部域の中期末新段階

3. 九日田式の成立過程と展開（第31図）

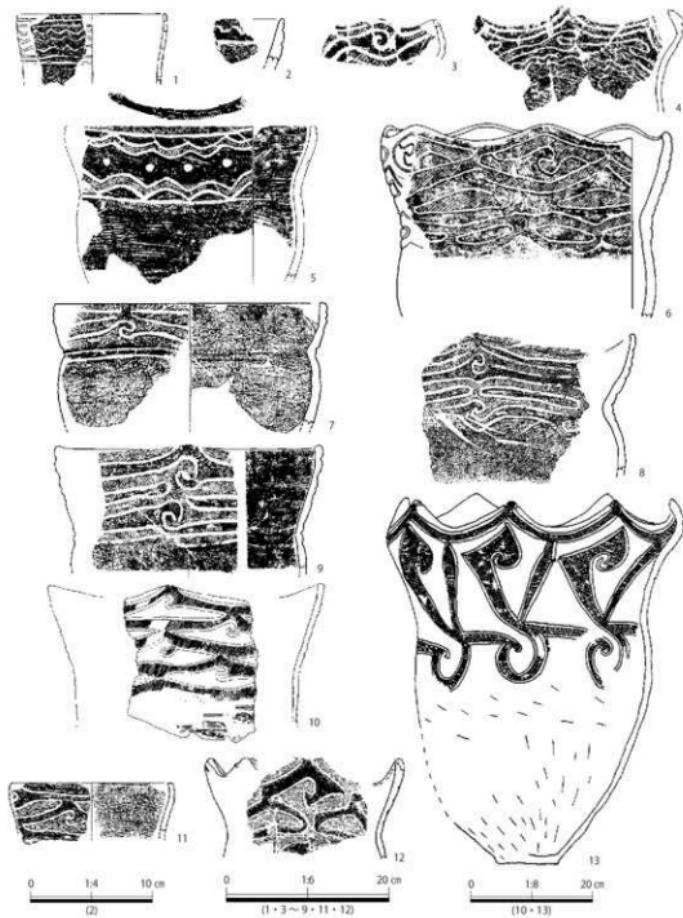
九日田式は、山陰地方中部域における後期初頭・中津式の地方型式で、横位展開するJ字文様と強くくびれる器形が特徴である（柳浦2003）。北浦松ノ木遺跡では、九日田式の良好な個体が出土した（第31図-5）。この土器は、九日田式の成立を考えるうえで重要である。

第31図-5は、横走する縄文帯に挟まれて対向する波状意匠が描かれ、その中に凹点文が配されている。6は口縁部に菱形の区画文が、頸部に紡錘形の区画文が連なっている。両者とも対向する波状意匠の磨消縄文帯が上下に繋がった意匠と考えられる。

第31図-5は最下部の縄文帯が磨消縄文になっていないこと、6は菱形区画文に取り付いた小J字文が区画文と一体化していないことから、この2つは九日田式成立期に位置付けられる（幡中2012）。波状意匠や菱形の区画文は、中期末の波状文から発生した意匠と想定することができる。第31図-1を磨消縄文化すれば5となり、波状口縁の形成に連動して磨消縄文化すれば6のような菱形区画文となろう。九日田式の文様意匠は、中期末の波状文を母体として誕生したと考えられる。なお、波状文は始源を里木Ⅱ・Ⅲ式の連弧文に求められ、中期末を通じて一般的な文様である（2）。

第31図-6にみえる小J字文も、中期末には成立していたようである（第30図-1）。岡山県長縄手遺跡（岡山県教委2005）ではこの祖形となりうる文様があり（3）、これが中期末新段階に小型J字文に変化する（4）と考えられる。これが山陰地方中部域に導入され（6）、九日田式古段階の主要文様となる（7）。

第31図-3と同様な文様は、山陰地方では少なく、瀬戸内地方によくみられる（岡山県教委2005）。瀬戸内地方の後期初頭・中津式の文様構成は、縦位展開を基本とし、文様が横位展開をする中期末とは基本理念に断絶が認められる。それに対し、山陰地方中部域の中津式である九日田式は、横位展開に終始している。このことから考えると、中津式が成立する段階には、すでに地域性が確立していたと思われる。



1：中期末古段階 2～4：中期末新段階 5・6：九日田式成立期 7～9：九日田式古段階 10～12：九日田式新段階 13：五明田式

第31図 山陰地方中部域の後期初頭土器の系譜と変遷図

後続の福田K2式に併行する山陰地方中部域の地方型式として、五明田式がある（第31図-13）。これは、沈線文末端が途切れて絡むものの、2本の沈線文による磨消縄文が維持されている。文様意匠は、鉤状J字文と渦巻き状J字文が主体となる。五明田式の鉤状J字文はどのように誕生するのだろうか。

第31図-12は、中津式の特徴である一筆書きの手法ながら、意匠は五明田式にかなり近い。11もJ字文の形状は端部が尖っており、五明田式のJ字文に似る。このようなJ字文は、8の口縁部意匠や、10の縄文帯が反転することによって発生した文様意匠で、いわゆるネガ・ポジ現象がここでも起こった可能性が考えられる。特に、10と11の縄文帯反転は直截的である。12の意匠も同様な経緯で出現したと思われ、これが五明田式の鉤状J地文の基礎となつたと考えられる。⁽³⁾

以上をまとめると、九日田式の成立に関する文様変遷は、里木II・III式の連弧文から変容した中期末古段階の波状文を母体とし、中期末新段階に導入された小J字文が組み込まれて九日田式が成立したと考えられる。さらに、九日田式新段階で、文様のネガ・ポジ反転現象が起こって鉤状J字文が出現し、沈線文末端が絡む五明田式へ展開すると想定できるのである。この間、小J字文の導入など、他地域からの影響が認められるものの、在地的な様相が一貫して認められ、中津式、福田K2式段階で最も当地の地域性が顕著になったといえる。この時期がまさに、九日田式・五明田式に相当するのである。

結語

本稿では、北浦松ノ木遺跡出土の土器をもとに、中期後葉から後期初頭の変遷を概観した。攢糸文が里木II・III式新段階まで残存することを主張したが、今のところ議論する材料が北浦松ノ木遺跡に限られているので、今後の状況を注視する必要がある。

繰り返しになるが、当地の中期後葉から中期末の土器は散発的で、全形が窓える大きな破片も少ない。加えて、各遺跡の該期土器は多様であり、なかなか共通項を見い出せない状況にある。本稿で示した編年案も、将来良好な資料が蓄積すれば再編されるべきであろう。

後期初頭・九日田式については、資料的にはこれまでにかなりの蓄積があるが、型式学的な解釈は十分とは言えない。本稿では、中期末の在地的な土器が母体となって九日田式が成立し、さらに五明田式に展開する過程を示した。九日田式新段階に起つたネガ・ポジ反転現象は比較的理説しやすいと思われるが、同様に成立期から古段階にかけてもネガ・ポジ反転現象が起つた可能性があり、これについては未だに考えがまとまっていない。成立過程も含め、この整理が必要となろう。

【註】

(3) 千葉豊・曾根茂は、中津II式から福田K2式古段階（五明田式）への変化を文様自体の変遷としており、ネガ・ポジ反転現象とはみていない。当地では、中津II式に相当する土器が未だ少ないので、この間の変化についてはもう少し状況を見る必要がある。

【参考文献】

- 泉 拓良 1985 「北白川追分町出土遺跡の縄文土器 中期末縄文土器の分析」『京都大学埋蔵文化財調査報告Ⅲ—北白川追分町縄文遺跡の調査—』京都大学埋蔵文化財研究センター
- 1988a 「縄元・里木式土器様式」『縄文土器大観3 中期II』小学校
- 1988b 「吹烟・醍醐式土器様式」『縄文土器大観3 中期II』小学校
- 鎌木義昌・高橋謙 1975 「縄文文化の発展と地域性 瀬戸内」『日本の考古学Ⅱ 縄文時代』河出書房新社
- 富井 真 2005 「遺構一括出土の縄文土器の位置づけ」「長編手遺跡」岡山県教育委員会
- 2008 「北白川C式土器」「絶賛 縄文土器」アムロプロモーション
- 幡中光輔 2012 「山陰地域の縄文時代中期末土器考—中期末から後期初頭への系譜的検討—」『島根考古学会誌第29集』島根考古学会
- 間壁忠彦・間壁茂子 1971 『里木貝塚 倉敷考古館研究集報第7号』倉敷考古館
- 柳浦俊一 2003 「山陰中部域における縄文時代後期土器の地域性—特に「中津式」の地域性について—」『立命館大学考古学論集III』立命館大学考古学論集刊行会
- 矢野健一 1993 「縄文時代中期後葉の瀬戸内地方」「江口貝塚I—縄文前期中期編—」波方町教育委員会・愛媛大学考古学研究室
- 1994 「北白川C式併行期の瀬戸内地方の土器」『古代吉備第16集』古代吉備研究会

【挿図引用文献】

- 泉 拓良 1985 「北白川追分町出土遺跡の縄文土器 中期末縄文土器の分析」『京都大学埋蔵文化財調査報告Ⅲ—北白川追分町縄文遺跡の調査—』京都大学埋蔵文化財研究センター
- 宍道正年 1974 『島根県の縄文土器集成I』
- 間壁忠彦・間壁茂子 1971 『里木貝塚 倉敷考古館研究集報第7号』倉敷考古館
- 柳浦俊一 2012 「松江市美保閑町所在 小浜洞穴遺跡について」『古代文化研究20』島根県古代文化センター
- 岡山県教育委員会 2005 「長編手遺跡」
- 島根県・頼原町(現・飯南町)教育委員会 1992 「五明田遺跡発掘調査報告書」
- 島根県・木次町(現・雲南市)教育委員会 1997 「平田遺跡」
- 島根県・斐川町(現・出雲市)教育委員会 1998 「上ヶ谷遺跡発掘調査報告書」
- 2001 「杉沢Ⅲ・堀切Ⅰ・三井II遺跡発掘調査報告書」
- 島根県・松江市教育委員会 2000 「夫手遺跡」
- 島根県・(公財)松江市スポーツ振興財團 2016 「北浦松ノ木遺跡発掘調査報告書」
- 島根県教育委員会 1983 「才の峰遺跡」「道場9号窯ハイババ建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書IV」
- 1995 「オノ神遺跡」「普請場遺跡 島田黒谷I遺跡」
- 2000 「神原I遺跡」「神原II遺跡」
- 2002 「貝谷遺跡」
- 2003 「家の後I遺跡」「垣ノ内遺跡」
- 2007a 「家の後II遺跡2 北原本郷遺跡2」
- 2007b 「原田遺跡(3)」～5～7区の調査～
- 2010 「志谷III遺跡 安神本遺跡」
- 千葉豊・曾根茂 2008 「形式論の可能性—福田K2式を素材にして」『縄文時代第19号』縄文時代文化研究会
- 鳥取県・鳥取市教育委員会 1978 「桂見遺跡発掘調査報告書」
- 鳥取県・福部村(現・鳥取市)教育委員会 1990 「栗谷遺跡発掘調査報告書III」
- 鳥取県・米子市教育委員会 1984 「陰田」
- 1986 「久目美遺跡」
- (財)鳥取県教育文化財团 1984 「久古第3遺跡・貝田原遺跡・林ヶ原遺跡発掘調査報告書」

【挿図出典】○は遺跡名。団は、実際の観察に基づき、筆者の判断で類似や拓本の向きを変えたものがある。

- 【第26図】 1～9(北浦松ノ木)…松江市教委・松江市スポーツ振興財團 2016
10・12・13(里木貝塚)…間壁他 1971 (栗谷)…福部村教委 1990
- 【第27図】 1～3(北浦松ノ木)…松江市教委・松江市スポーツ振興財團 2016 4(小浜洞穴)…柳浦 2012
5(夫手)…松江市教委 2000 6(龍ノ駒)…宍道 1974 7・10(貝谷)…島根県教委 2002
8(垣ノ内)…島根県教委 2003 9(家の後II)…島根県教委 2007a 11(星田式・模式図)…泉拓良 1985
12(林ヶ原)…島根県教育文化財團 1984
- 【第28図】 1・2・9(家の後II)…島根県教委 2007a 3～10・13・14・18・22(垣ノ内)…島根県教委 2003
11・29(久目美)…米子市教委 1986 12・28(貝谷)…島根県教委 2002 15(志谷Ⅲ)…島根県教委 2010
16・19・20・25～27(原田)…島根県教委 2007b 21(陰田)…米子市教委 1984
- 【第29図】 1・2・5・6・8・10・11・16(家の後II)…島根県教委 2007a 3・4・18(志谷Ⅲ)…島根県教委 2010
7(夫手)…松江市教委 2000 9(才の峰)…島根県教委 1983 14・19・21・22(貝谷)…島根県教委 2002
15・25(神原II)…島根県教委 2000 17(垣ノ内)…島根県教委 2003 20・24(五明田)…頼原町教委 1992
23(原田)…島根県教委 2007b
- 【第30図】 1(神原II)…島根県教委 2000 2(上ヶ谷)…斐川町教委 1998 (補中2012より転用)
3・10・16(貝谷)…島根県教委 2002 4(志谷Ⅲ)…島根県教委 2010
5～7・11・17(家の後II)…島根県教委 2007a 8・12(島田黒谷I)…島根県教委 1995
13(原田)…島根県教委 2007b 14・15(三井II)…斐川町教委 2001
- 【第31図】 1(才の峰)…島根県教委 1983 2・7～9・11(貝谷)…島根県教委 2002
3・4(長編手)…岡山県教委 2005 12(志谷Ⅲ)…島根県教委 2010 13(平田)…木次町教委 1997

第7章 総括

北浦松ノ木遺跡は、島根半島北岸部に位置し、海岸線より約 500 m 内陸地に所在する。南側には山地が連なり、海と山に挟まれた場所に位置する遺跡である。

調査では、墓壙 1 基、柱穴群、自然流路を検出し、自然流路の 27 層上面では生活面を確認している。遺物は、縄文土器、石製品、黒曜石、骨、堅果類が出土している。

今回の調査で得られた成果に若干の考察を加え、まとめとしたい。

1. 遺構（第32図）

墓壙（ST01）は、調査区北西側で検出した。墓壙内からヒトの足の骨の一部が出土し、鑑定の結果から男性の可能性が指摘されている。墓壙内より出土した縄文土器から時期を明確にすることは出来なかったが、樹皮の年代測定では、暦年較正年代で約 4500 ~ 4600 年前という結果が得られている。縄文時代後期前半期の遺跡である貝谷遺跡や林原遺跡では、竪穴建物跡の周辺から土壤墓や配石遺構が検出されている。また、郷路橋遺跡の C 区では、住居状遺構の近くから自然礫を配した土壌が確認されている。これらの土壤墓等の規模は、長軸が約 2 m 以内、短軸が約 1 m を測り、この調査例からすると ST01 も同規模の可能性が考えられる。

自然流路（NR01）からは、縄文時代中期後葉から後期初頭の遺物が出土し、後期初頭までに埋没したと考えられる。また、27 層上面から、炭化物や土器、石製品、獸骨、堅果類が出土し、生活面が確認された。この生活面から出土した土器の時期は縄文時代後期初頭であり、炭化物の年代測定においても、暦年較正年代で約 4500 ~ 4600 年前という結果が得られていることから整合的である。年代測定結果からすると、生活面と ST01 が同時期に存在していた可能性は高い。

NR01 に囲まれた微高地部分からは柱穴を多数検出し、建物が建っていたと考えられる。これらの柱穴は径が小さく、浅いものが多い。中国地方における遺跡の調査例をみると、縄文時代の住居の構造は、細い柱を円形にめぐらせて上屋を造るものが多く、しっかりとした屋根を支えるための太い柱を持たないものが多い⁽⁴⁾。本遺跡もこれと同じ状況にあり、また、重複するピットがあることから、建替えが行われていた可能性が考えられる。柱穴群から明確な時期を示す遺物は出土しておらず、柱穴群が NR01 と同時期に存在していた可能性は捨てきれないが、検出状況から推察すると、NR01 埋没後に墓壙や生活面と同時に機能していた一連のものとして捉えてもいいように思われる。

このことを踏まえ、復元した建物跡を含む想定図を第32図に掲載している。但し、柱穴周辺から焼土や炭化物が出土していないことから建物跡を復元する根拠がなく、あくまでも調査者の主観であり、柱穴の並びのみで検討した建物跡の想定図であることを前置きしておく。3棟の竪穴建物跡を想定し、仮 ST01 ~ 仮 ST03 とした。仮 ST01 は、直径 2.85 m、面積 6.4 m²、柱穴は深さ 10 ~ 20 cm を測る。仮 ST02 と 03 は一部が重複し、建替えられたものとして想定している。この 2 棟は、直径 3.8 ~ 3.85 m、面積 11.3 ~ 11.6 m²、柱穴の深さは 10 ~ 30 cm を測る。柱穴の規模からすると、安定性の低い上屋構造であったと思われ、耐久性はそれほど高くなかったと考えられる。次に、建物の面積に

について、例えば人一人が居住するのに約3m⁽⁵⁾必要だと考えた場合、仮ST01～03の面積では2～3人程度の居住スペースと考えられる。このように仮定すると、仮ST01とST02には5～6人程度しか居住していなかったと思われる。

また、この場合には建物の近くに墓壙が存在することとなる。ある程度まとまった人数での集落の定住生活であれば、快適性や安全性を維持するため、食物の廃棄場所や墓域など、空間の計画的な利用、区別が必要となる。しかし、少人数単位の生活であれば空間の区別は必要ないと思われ、また、居住スペースの規模からみても、本遺跡に居住していたのは少数単位の家族の可能性が考えられる。但し、調査区周辺において当該期の建物跡等が検出された場合には検討が必要となる。

次に、生活面について、炭化物が集中して出土したところが屋外または屋外かについては、調査成果からは判断できなかった。しかし、炭化物の近くから土器や獸骨が出土しており、煮炊きを行っていたことは明らかである。焼土は出土していないが、近くに炉が存在した可能性は高い。

以上、墓壙、建物跡、生活面を一連のものとし、縄文時代後期初頭における一つの居住域を想定した。今後の縄文時代後期の集落を検証するうえで、一資料となりえたものと考える。

2. 遺物（第33図、表5・6）

縄文土器

今回出土した縄文土器を包括的に評価すると、時期については、中期後葉、里木II・III式の新段階から中期末の古段階にかけてと、やや時間をおいて後期初頭の土器がある。北白川C式や矢部奥田式の影響を受け在地化したものや、類似しているものが含まれ、客観的に混在していた。また、第6章にて柳浦氏が指摘したように、撫糸文が里木II・III式の新段階まで残存する可能性が示唆されたことは注目すべき点である。本遺跡から出土した土器が、山陰中央部域における縄文土器の一資料となつたことは有意義であった。

第33図に、島根県における縄文時代中期末土器出土の遺跡分布を示した。島根県の東部、特に中海・宍道湖周辺の沿岸部では、北白川C式、矢部奥田式が共存する状況がみられるが、どちらともを主体とする遺跡はみられない。また、北白川C式は、東部で出土しているが西部では確認されていない。それに対し、矢部奥田式は、西部の遺跡でも確認されている状況が窺われる。中海北岸に位置する夫手遺跡では、本遺跡と同じ状況がみられ、北白川C式や矢部奥田式は波状的、貫入的に波及したものと考えられる。

出土した破片の器面地文及び調整痕の内訳を表5に掲載している。また、表6に外面のみについてグラフをしている。破片の部位にもよるが、外面で一番多くみられたのは巻貝条痕と撫糸文である。それらに比べると、二枚貝条痕や縄文は非常に少ない。これは、本遺跡周辺において、縄文時代中期後葉から中期末の遺跡の存在を窺わせる状況である。また、土器片のなかには、節の小さな縄文と節の大きな縄文がみられ、節の大きなものは中期前半、船元式の可能性が考えられ、当該期の遺構も窺われる。

石製品

石製品は、ピット内から出土した石鏃、磨石以外、その多くは NR01 から出土している。

黒曜石の総点数は 158 点である。石鏃、UF、RF、SC、楔形石器などの他、多くの剥片や原石が出土している。剥片や RF には原礫面が多く認められ、原石がそれ程大きくはない、拳大位の大きさで持ち込まれた可能性が高い。剥片や石核は原石の大きさに比例し、大型剥片は少なく、大半が 1 ~ 3 cm の小型のものである。製品についても、大型のものはみられない。

出土した黒曜石の表面を観察すると、表面に余り光沢がないものと、光沢が強いものが確認される。前者は多く遺跡で出土事例がある隱岐の島町久見産のものであり、後者は同じ隱岐の島町津井産のものと思われる。⁽⁹⁾ 津井産と思われる破片は、総点数の内 7 点認められた。本遺跡の黒曜石は久見産が主体であるが、津井産の黒曜石も持ち込まれ、利用していたと考えられる。また、出土したものの中には表面が白濁したものがあり、火を受けた痕跡が認められた。

黒曜石以外の石製品では、磨石、敲石、石皿、不明石製品が出土している。磨石、敲石は、手の中に納まる利便性のよい大きさの石を選び、川や海が近いことから、材料には困っていなかったようである。他に、大型の石皿が出土している。石皿の表面は、動植物から出た有機物が付着し、表面は滑沢であり、狩猟獲物や堅果類等の処理、加工に頻繁に使用されていたと思われる。

今回の調査では、石錘は 1 点も出土していない。しかし、魚骨が出土していることや位置的環境から、漁撈を行っていたことは明らかである。これについて考えられる理由として、近くを流れる河川が小河川であり、投網を使うような内水面漁撈を行っていないかったこと、外水面漁撈においても投網による漁を行っていないことが要因と思われる。⁽⁹⁾ 調査範囲が限られていたこともあるが、魚骨のなかに淡水魚の骨がないことからもその可能性が窺われる。但し、その他の釣針やヤスなどの漁具もまた見られないことから、付近での漁撈の実態は今後別の遺跡でも検討を要する。

動物遺存体

今回出土した動物遺存体は、約 240 点である。魚類 7 種、鳥類 1 種、哺乳類 6 種、計 14 種が確認された。哺乳類ではイノシシ、ニホンジカ、アナグマやニホンザル、アザラシかオットセイ、魚類ではマグロ属、タイ、スズキ等、鳥類ではウ科、キジ科の骨が出土している。イノシシやマグロ属の骨からは、島根半島において当該期に大型の個体が生息していたことを示すものが認められた。動物の骨には、人為的な解体痕や痘痕状の痕跡がみられるもの、加工が施された骨も確認されている。痘痕状の痕跡があることから、狩猟時にイヌを利用した可能性も考えられる。

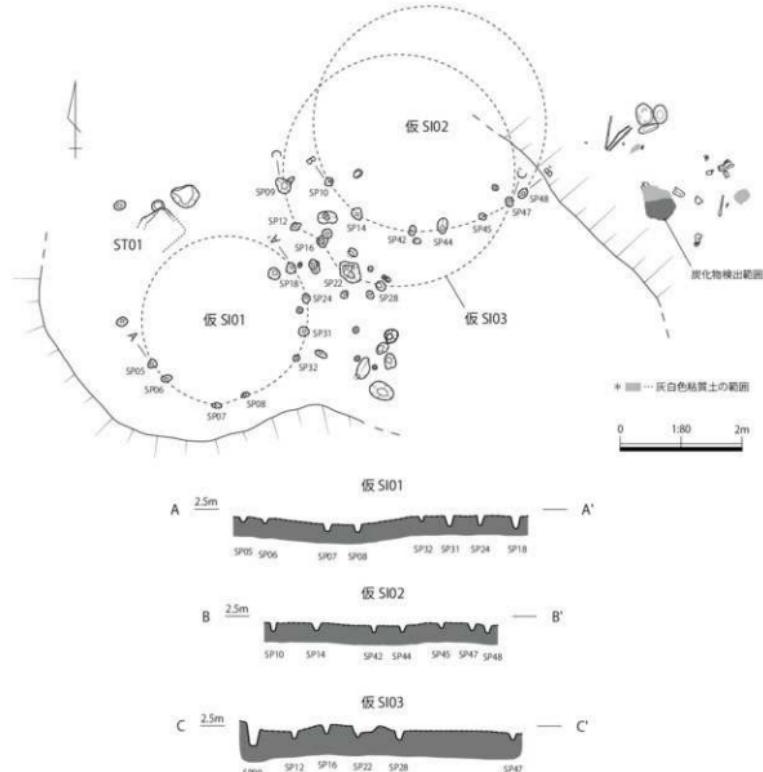
マグロ属の骨は、縄文時代後期前半に位置付けられているサルガ鼻洞窟遺跡からも出土し、島根半島周辺で捕獲できる貴重な食料のひとつと考えられる。

動物遺存体からも、獲得、利用した食料が多岐にわたっていることがわかる。季節や食料の種類によって移動しなくてはならない状況にあったとしても、食料資源が豊富な場所であることから、本遺跡周辺を拠点とする居住形態であった可能性が高い。どの程度定住可能であったかは、食料残滓や今少し広域的な遺跡群の動向も踏まえ検討されるべきであろう。

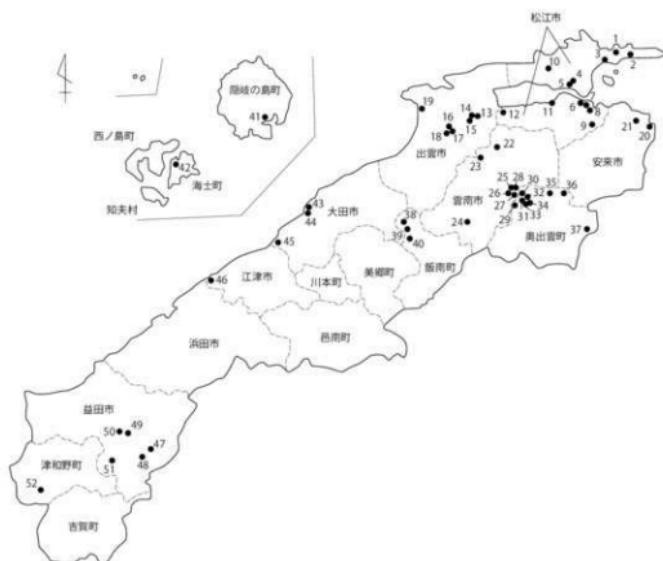
3. おわりに

今回の調査では、縄文時代中期後葉から後期初頭における、人々の生業形態や居住域の状況の一端が明らかになった。先述したように、中期後葉から後期初頭の土器がある程度の量出土していることや、建物が建替えられたこと、また、位置的にも食料獲得に適した場所であったことから、移動の必要のない居住形態であった可能性が高い。周辺の環境を生かし、狩猟・採集活動、漁撈を組み合わせた多角的な生業形態をとっていたものと考えられる。

今回の調査によって、島根半島北岸部における縄文時代中期末から後期初頭の様相を垣間見ることができたのは有意義であり、山陰中央部域における縄文時代を検証するうえでの一助となり得たと思われる。島根半島東部の縄文時代の遺跡は、中海沿岸や境水道北側で多く確認され、北岸部での調査例は少ない状況にある。今後の資料の蓄積によって、縄文時代の様相が明らかになることを期待したい。



第32図 北浦松ノ木遺跡における竪穴建物跡想定図 (S=1:80)



津和野町		益田市				江津町		大田市				海士町		郡山町				饭南町				奥出云町							
52	51	50	49	48	47	46	45	44	43	42	41	40	39	38	37	36	35	34	33	32	31	30	29	下向賀曾越	北田川式	近畿系			
高田屋敷	高田屋敷	正門A道跡	古瀬	仁萬人道跡	下西海道	郡山跨	郡山跨	中相馬	日吉谷	五石道	御前山道	上今必造跡	葛谷	家ノ船	林	坂井	原田跡	原田跡	原田跡	原田跡	原田跡	原田跡	原田跡	平式	平式	近畿系			
		正門B道跡	古瀬	仁萬人道跡	下西海道	郡山跨	郡山跨	中相馬	日吉谷	五石道	御前山道	上今必造跡	葛谷	家ノ船	林	坂井	原田跡	原田跡	原田跡	原田跡	原田跡	原田跡	原田跡	坂井式	坂井式	近畿系			
		●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	阿高式	阿高式	近畿系			
		●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	改版	制突	隈德文系			
		●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	大光院酒造系	大光院酒造系	近畿系			

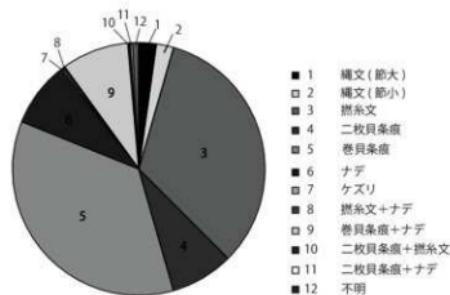
* 柳中克輔 2012『鳥相馬考古学会誌』『山陰地域の國文時代中期末土器考—中期末から後期初頭への系統的検討—』図1を一部改編して、則裁した。

第33図 島根県における縄文時代中期末土器出土の遺跡分布と系統別一覧

表5 繩文土器 - 地文・器面調整痕内訳表

外側 内側	縄文 (節大)	縄文 (節小)	撚糸文	二枚貝条痕	単貝条痕	ナデ	ケズリ	撚糸文 + ナデ	単貝条痕 + ナデ	二枚貝条痕 + 撚糸文	二枚貝条痕 + ナデ	不明	合計
二枚貝条痕	1	0	4	32	3	0	0	0	1	0	1	0	42
単貝条痕	0	2	42	5	124	1	0	1	0	1	0	0	176
ナデ	15	14	177	12	97	54	1	1	25	0	0	4	400
ケズリ	0	0	3	0	1	2	1	1	1	0	0	0	9
単貝条痕 + ナデ	0	0	0	1	17	0	0	0	31	0	0	0	49
二枚貝条痕 + ナデ	0	0	0	4	0	0	0	0	0	0	0	0	4
単貝条痕 二枚貝条痕	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	1
不明	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	3	3
合計	16	16	226	54	243	57	2	3	58	1	1	7	684

表6 外側 - 地文・器面調整痕内訳表



【註】

- (4) 山田康弘氏は、2015『つくられた縄文時代』「第4章 縄文のキーワード—定住・人口密度・社会複雑化」のなかで、中国地方における縄文時代の住居跡について、細い柱を円形にめぐらせて上屋を造るものが多く、しっかりとした屋根を支えるための太い柱をもたないものがほとんどである。と述べておられる。
- (5) (4) の記述をふまえ、山田康弘氏は、中国地方の住居はあまり堅牢な構造のものではなく、その耐久性はそれほど高くなかったと想定しておられる。
- (6) 山田康弘氏は、床面積が15m²以下の場合、人一人が居住するには大人が手足を広げた大きさとほぼ同じ約3m²必要だと考へ、ひとつの住居に居住できた人数は最大でも5人程度である。と記述しておられ、それを参考にしている。
- (7) 山田康弘氏は、(4) の文献のなかで、定住の進展、人口(密度)の増加について述べておられ、それを参考にしている。
- (8) 島根県古代文化センター 研究員 稲田陽介氏の御教示による。島根県隠岐の島町では、久見、加茂、津井の3箇所で黒曜石の産地が確認されている。松江市周辺の調査では、久見産が多く確認されている。
- (9) 島根県古代文化センター 研究員 稲田陽介氏の御教示による。

【参考文献】

- 国土交通省中国地方整備局・島根県教育委員会 2002『貝谷遺跡』
 国土交通省中国地方整備局・島根県教育委員会 2007『林原遺跡』
 島根県教育委員会 1991『中国横断自動車道広島浜田線建設予定地内 埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅲ』
 舗中光輔 2012『山陰地域の縄文時代中末期土器考—中期末から後期初頭への系譜的検討—』『島根考古学会誌』第29集
 島根考古学会
 山田康弘 2015『つくられた縄文時代』

遺物觀察表

土 器

遺物 番号	出土位置	出土土層	種類	容積・深度	寸法(cm)			文様・調査の特徴		備考	
					上口	底径	高さ	外側			
								内側			
4-1	T-1	-	縄文土器	深鉢	-	-	4.6	内面凹凸文 縄文、二枚貝条痕	唇口条面・ナデ	中朝末(近江田式)	
4-2	T-1	-	縄文土器	-	-	-	3.8	縄文	ナデ	中朝後半	
4-3	T-1	-	縄文土器	深鉢	-	-	7.0	内面の竹筋文 舟貝条痕	二枚貝条痕	中朝末	
4-4	T-1	-	縄文土器	-	-	-	3.2	神奈川文(LR) ナデ	ナデ	後期初期	
4-5	T-1	-	縄文土器	深鉢	-	-	6.4	神奈川文(LR) 二枚貝条痕	唇口条面	中朝末~後期初期	
4-6	T-1	-	縄文土器	底盤	-	6.4	2.0	ナデ	ナデ	円底	
11-1	NB01	26 組	縄文土器	口縁部	-	-	3.9	平底竹筋による斜刃文 墨文	ナデ	里木Ⅱ・Ⅲ式(新潟路)	
11-2	NB01	26 組	縄文土器	口縁部	-	-	2.2	波状文、口縁端に波状文 ナデ	ナデ	中朝末	
11-3	NB01	26 組	縄文土器	口縁部	-	-	3.2	内面による斜方の凹凸文 墨文(注記)	ナデ	中朝末	
11-4	NB01	26 組	縄文土器	口縁部	-	-	3.85	斜方波状文・網目文 内面凹凸文	二枚貝条痕・ナデ	中朝末	
11-5	NB01	26 組	縄文土器	口縁部	-	-	3.1	船底波状文、内面斜方の凹凸文 墨文	舟貝条痕・ナデ	里木Ⅱ・Ⅲ式(新潟路)	
11-6	NB01	26 組	縄文土器	底盤	-	-	7.0	波状文、平行波状文 墨文	唇口条面・ナデ	中朝末 チャリバー近江路	
11-7	NB01	26 組	縄文土器	-	-	-	3.0	2列波状の方筋波状文・波状文 ナデ	ナデ	中朝末	
11-8	NB01	26 組	縄文土器	底盤	-	-	6.1	波状文・沈殿文 舟貝条痕・ナデ	二枚貝条痕	中朝末	
11-9	NB01	26 組	縄文土器	-	-	-	3.0	複数または二重形斜の凹凸文	ナデ	中朝末	
11-10	NB01	26 組	縄文土器	底盤	-	-	5.15	斜波文 墨文(LR)・ナデまたは玉竹牛	ナデ	中朝末	
11-11	NB01	26 組	縄文土器	-	-	-	3.35	波状文	ナデ	後期中期(九日田式)	
11-12	NB01	26 組	縄文土器	深鉢	23.2	-	16.6	神奈川文・凹凸文 ナデ	二枚貝条痕	後期中期(九日田式・古説路)	
11-13	NB01	26 組	縄文土器	口縁部	-	-	3.6	國文(国文RLLR)	舟貝条痕	中朝末	
11-14	NB01	26 組	縄文土器	口縁部	-	-	3.1	舟貝条面	舟貝条面・ナデ	中朝末	
11-15	NB01	26 組	縄文土器	口縁部	-	-	2.9	舟貝条面・ナデ	舟貝条面	中朝末	
12-1	NB01	26 組	縄文土器	底盤か?	-	-	10.5	二枚貝条痕・ナデ	二枚貝条痕・ナデ	直径1.2mの穿孔あり	
12-2	NB01	26 組	縄文土器	底盤下部 -底盤	-	8.8	4.8 6.2	舟貝条痕	ナデ・舟貝条痕		
12-3	NB01	26 組	縄文土器	底盤	-	7.4	3.5	ナデ	ナデ		
12-4	NB01	26 組	縄文土器	底盤	-	9.4	4.4	ナデ	ナデ		
12-5	NB01	26 組	縄文土器	底盤	-	9.7	4.6	ナデ	ナデ		
14-1	NB01	27 組上面	縄文土器	深鉢	30.0	-	18.6	神奈川文・沈殿文 二枚貝条痕	二枚貝条痕	後期中期(九日田式或成層期)	
14-2	NB01	27 組上面	縄文土器	深鉢	22.4	-	22.1	神奈川文(LR)・凹凸文 二枚貝条痕	二枚貝条痕	後期中期(九日田式或成層期)	
14-3	NB01	27 組上面	縄文土器	底盤	-	-	11.9	一枚貝条面	一枚貝条面		
16-1	NB01	27 組	縄文土器	-	-	-	3.6	小さな波状文・沈殿文 墨文	ナデ	里木Ⅱ・Ⅲ式(古説路)	
16-2	NB01	27 組	縄文土器	口縁部	-	-	3.4	1.8mmの突起状穴 舟貝条面	舟貝条面		
16-3	NB01	27 組	縄文土器	底盤か?	-	-	3.6	斜波文 墨文	ナデ	里木Ⅱ・Ⅲ式(新潟路)	
16-4	NB01	27 組	縄文土器	-	-	-	1.75	斜波文 墨文	ナデ	里木Ⅱ・Ⅲ式(新潟路)	
16-5	NB01	27 組	縄文土器	深鉢	-	-	8.1	斜波文2列で、斜め方向や横方向にナ ーフを描く。 墨文	ナデ	里木Ⅱ・Ⅲ式(新潟路)	
16-6	NB01	27 組	縄文土器	-	-	-	4.8	國文(LR)	舟貝条面・ナデ	船元式に似た國文	
16-7	NB01	27 組	縄文土器	-	-	-	6.2	國文(LR) 一次調整は舟貝条面か	二枚貝条痕	船元式に似た國文	
16-8	NB01	27 組	縄文土器	-	-	-	3.1	國文	ナデ	船元式に似た國文	
16-9	NB01	27 組	縄文土器	深鉢	27.5	-	10.0	舟貝条面・ナデ	舟貝条面・ナデ	中朝末	
16-10	NB01	27 組	縄文土器	底盤	-	4.0	2.7	ナデ	ナデ	円底	
17-1	NB01	28 組	縄文土器	深鉢	-	-	5.2	束縛文 國文(RL)	ナデ	チャリバー近江路 中朝末(近江田式)	
17-2	NB01	28 組	縄文土器	深鉢	-	-	5.4	束縛文 國文(RL)	ナデ	チャリバー近江路 中朝末(近江田式)	

遺物 番号	出土位置	出土土層	種類	沿棒・部位	測量 (cm)			文様・調査の特徴		備考	
					直角		幅員	外側			
					横幅	底幅		縦幅	横幅		
17-3	NR01	28 組	織文土器	口縁部	-	-	3.1	口縁部肥厚、底輪文 ナデ	ナデ	中間末 (矢張地山式)	
17-4	NR01	28 組	織文土器	口縁部	-	-	2.4	口縁部肥厚 ナデ	ナデ	中間末 (矢張地山式)	
17-5	NR01	28 組	織文土器	口縁部	-	-	3.4	口縁部肥厚、内側及び幅員内斜状の剥落 文、ナデ	各貝条痕+ナデ	中間末 (矢張地山式)	
17-6	NR01	28 組	織文土器	口縁部	-	-	2.1	口縁部肥厚による剥落文、底輪文、ナデ 内側に各貝条痕による剥落文、底輪文、ナデ	ナデ	中間末	
17-7	NR01	28 組	織文土器	口縁部	-	-	2.95	口縁部の剥落文、各貝条痕	各貝条痕	中間末	
17-8	NR01	28 組	織文土器	深鉢	-	-	6.9	口縁部間に各貝条痕による剥落文、 内側と各貝条痕による剥落文、ナデ	ナデ	中間末	
17-9	NR01	28 組	織文土器	口縁部	-	-	3.3	ナデ	ナデ	中間末	
17-10	NR01	28 組	織文土器	口縁部	-	-	4.6	口縁部部や内壁厚し、平底。 各貝条痕、ナデ	ナデ	中間末	
17-11	NR01	28 組	織文土器	口縁部	-	-	5.4	内や内側する口縁部、ナデ	ナデ	中間末	
17-12	NR01	28 組	織文土器	深鉢	-	-	8.6	二枚貝条痕	ナデ・ケズリ	中間末	
17-13	NR01	28 組	織文土器	深鉢	-	-	7.3	口縁部間に一枚貝条痕による剥落 二枚貝条痕	二枚貝条痕	中間末	
17-14	NR01	28 組	織文土器	-	-	-	3.2	織文	各貝条痕	船元式に似た織文	
17-15	NR01	28 組	織文土器	-	-	-	4.3	織文	ナデ		
17-16	NR01	28 組	織文土器	-	-	-	3.7	各貝条痕	ナデ		
17-17	NR01	28 組	織文土器	-	-	-	6.1	ナデ	ナデ		
17-18	NR01	28 組	織文土器	底部	-	11.6	2.0	ナデ	ハラ状工具による調整痕+ナデ	四式	
17-19	NR01	28 組	織文土器	底部	-	5.6	3.5	ハラ状工具による調整痕	ハラ状工具による調整痕+ナデ	高台式	
19-1	NR01	29 組	織文土器	口縁部	-	-	3.2	口縁部肥厚、底部に古い剥離 織文	織文+ナデ	里木Ⅱ・Ⅲ式 (剥離痕)	
19-2	NR01	29 組	織文土器	口縁部	-	-	3.0	縫方向、目め方向の沈線、目め方向の 剥離内に円形の剥離、その文様の上 部に不規則な剥離文。	ナデ式 (剥離痕) 取り扱い難	里木Ⅱ・Ⅲ式 (剥離痕)	
19-3	NR01	29 組	織文土器	口縁部	-	-	3.6	ナメ・縫方向、上端に浅縫文 織文	ナデ・二枚貝条痕	中間末 (江戸川C式)	
19-4	NR01	29 組	織文土器	口縁部	-	-	6.3	單邊織文、織文 各貝条痕+ナデ	ナデ	中間末 (江戸川C式) 第17回 1・2と同形	
19-5	NR01	29 組	織文土器	口縁部	-	-	4.6	平行状織文、内形の網状文 織文	ナデ	中間末 (江戸川C式)	
19-6	NR01	29 組	織文土器	深鉢	-	-	12.8	各貝条痕+ナデ	各貝条痕・ナデ		
19-7	NR01	29 組	織文土器	小型の深鉢	10.5	5.4	8.9	各貝条痕・ナデ	各貝条痕・ナデ	四式	
19-8	NR01	29 組	織文土器	底部	-	-	4.8	ナデ	ナデ		
19-9	NR01	29 組	織文土器	底部	-	-	7.3	3.2	各貝条痕・ナデ	ナデ	
20-1	NR01	30 組	織文土器	深鉢	33.0	-	9.5	平行状織文、織文	ナデ	里木Ⅱ・Ⅲ式 (剥離痕)	
20-2	NR01	30 組	織文土器	底部	-	7.8	3.1	ナデ	ナデ	高台式	
21-1	NR01	31 組	織文土器	口縁部	-	-	3.0	手取した工具による剥落文 織文?	各貝条痕+ナデ	中間末 (江戸川C式)	
21-2	NR01	31 組	織文土器	-	-	-	2.7	押込文を弧状にした文様 ナデ	ナデ・二枚貝条痕	中間末 (江戸川C式)	
21-3	NR01	31 組	織文土器	口縁部	-	-	3.3	單邊織文、織文、各貝条痕	ナデ	中間末 (江戸川C式) 第17回 1・2、第19回 4と 同形	
21-4	NR01	31 組	織文土器	底部	-	-	7.2	3.0	ナデ	ハラ状工具による調整痕	四式

遺物観察表

石製品

遺物 番号	出土位置	出土土層	種類	法則 (cm)			重量 (g)	備考
				最大長	最小幅	最大厚		
4.7	T-1	-	石斧	6.2	5.3	1.9	79.0	黒色質別、一部欠損。
9.2	SP15	埋土	磨石	13.6	9.1	6.7	1,000	縦かに擦痕がみられる
12.9	NR01	26 級	磨石	8.2	5.6	4.5	307	下側に磨打痕
12.10	NR01	26 級	磨石	10.4	9.8	4.5	675	一部欠損。表面は造らか。
12.11	NR01	26 級	石砧	25.8	19.0	7.3	4,000	均半分欠損。表面はD95m、滑らか。
15.1	NR01	27 級上層	石砧	31.3	22.9	7.3	6,500	表面はやや凹み、側面を呈する。 有機物質の付着あり。
15.2	NR01	27 級上層	石砧	36.0	27.6	7.3	10,500	表面はやや凹み、側面を呈する。 有機物質の付着あり。
15.3	NR01	27 級上層	磨石	34.4	12.0	10.1	6,000	縦側の磨石。表面は均一。滑れ。
16.13	NR01	27 級	磨石	9.5	8.8	3.9	479	下側に磨打痕
16.14	NR01	27 級	磨石	12.2	8.0	3.4	533	表面はやや凹み、滑らか。薄麻が僅かにみられる。
18.4	NR01	28 級	磨石	15.3	5.1	5.7	762	表面はやや凹み、滑らか。薄麻が僅かにみられる。
18.5	NR01	28 級	磨石	6.1	8.5	5.6	319	半分以上欠損。端に磨打痕。
19.12	NR01	29 級	不明石製品	6.2	2.4	0.5	11.6	側面に僅かに加工痕。黒色質別。
19.13	NR01	29 級	磨石	8.7	7.9	4.4	411	下側に磨打痕
19.14	NR01	29 級	磨石	14.2	6.5	5.4	822	一部欠損。表面は均一。滑らか。
20.3	NR01	30 級	不明石製品	8.3	5.45	2.9	196	ロート状に穿孔している 丸孔（最大）1.2cm

黒曜石

遺物 番号	出土位置	出土土層	種類	法則 (cm)			重量 (g)	備考
				最大長	最小幅	最大厚		
9.1	SP01	埋土	石器	2.1	1.3	0.4	0.88	平底式
12.6	NR01	26 級	石器未製品	3.2	2.0	0.7	4.7	瓶底平行の両凹を形成
12.7	NR01	26 級	磨石	4.3	2.0	1.1	8.7	対面に削離痕。両側削片か。
12.8	NR01	26 級	原石	5.9	3.4	2.5	40.4	角錐状の板状原石
16.11	NR01	27 級	UF	3.1	3.3	1.6	12.4	左側面に削離痕
16.12	NR01	27 級	坪	3.9	4.5	1.1	16.8	下側面にノッチ状の二次加工痕
18.1	NR01	28 級	坪	2.7	1.6	0.8	3.3	右端付近に二次加工痕。石器の未製品か。
18.2	NR01	28 級	石核	3.2	1.5	0.9	5.2	
18.3	NR01	28 級	SC	2.3	5.0	0.8	7.1	剥片の右側縁～右点部に刃部
19.10	NR01	29 級	石器	2.5	1.7	0.5	2.0	未製品の可能性
19.11	NR01	29 級	UF	4.1	6.1	0.9	15.1	側面に削離痕と二次加工痕
22.1	NR01	埋土	石器	1.2	1.0	0.2	0.3	先端部欠損
22.2	NR01	埋土	石器	1.8	1.0	0.3	0.5	先端部がわずかに欠損
22.3	NR01	埋土	石器	2.7	1.2	0.3	0.9	基部欠損。剥片がみられる。
22.4	NR01	埋土	剥片右部	2.7	1.9	1.4	7.1	尖端部につぶれ
22.5	NR01	埋土	原石	6.8	3.5	3.4	61.9	方柱状の剥片右部原石。下端部が割れています。

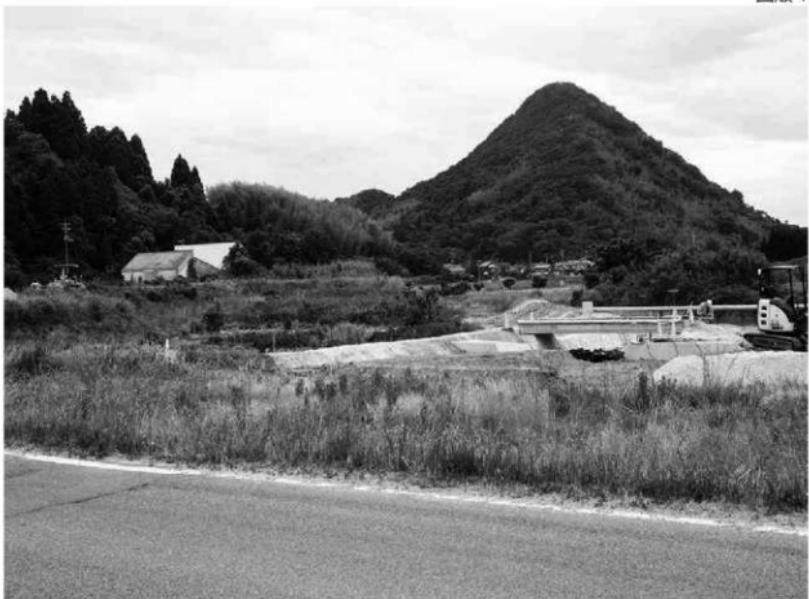
表7 NR01出土黒曜石内訳表

種類 出土地点	石器 (AR)		スクリーパー (Sc)		複型石器 (P)		加工版のある 石器 (S)		穿孔版のある 石器 (C)		刮削器 (G)		磨石 (R)		複合鉋點数	複合鉋重量(g)
	点数	重さ(g)	点数	重さ(g)	点数	重さ(g)	点数	重さ(g)	点数	重さ(g)	点数	重さ(g)	点数	重さ(g)		
26層	1	4.7	-	-	-	-	3	14.2	1	9.9	13	55.8	2	30.1	1	40.4
27層	-	-	-	-	-	-	1	16.8	1	12.4	6	33.0	3	28.4	-	-
28層	-	-	1	7.1	2	13.7	1	3.5	5	16.5	13	64.0	7	102.9	-	-
29層	1	2.0	-	-	-	-	1	6.8	3	27.2	16	71.4	2	29.7	-	-
30層	-	-	-	-	-	-	1	1.5	-	-	9	22.2	-	-	-	-
31層	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	2	22.3	-	-	-	-
32層	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	2	21.2	-	-	1	8.8
和田土 (鉄位不明)	3	1.7	-	-	1	7.1	-	-	7	20.0	43	135.9	4	20.8	1	61.9
複合鉋點数	5	-	1	-	3	-	7	-	17	-	104	-	18	-	3	-
複合鉋重量(g)	8.4	-	7.1	-	29.8	-	42.8	-	86.0	-	425.8	-	220.9	-	111.1	-
															158	922.9

表8 石製品内訳表

種類 出土地点	鐵石		磨石		石器		石斧		不明石製品		合計	
	T-1	-	-	1	-	-	1	-	-	-	2	
SP15	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	1	
NR01	26層	1	-	10	-	2	-	-	-	-	13	
"	27層	1	-	2	-	2	-	-	-	-	5	
"	28層	2	-	2	-	1	-	-	-	-	5	
"	29層	5	-	4	-	-	-	-	1	-	10	
"	30層	-	-	4	-	-	-	-	1	-	5	
合計		9	-	24	-	5	-	1	-	2	41	

写 真 図 版



北浦松ノ木遺跡調査前全景（南西から）



完掘状況（北東から）

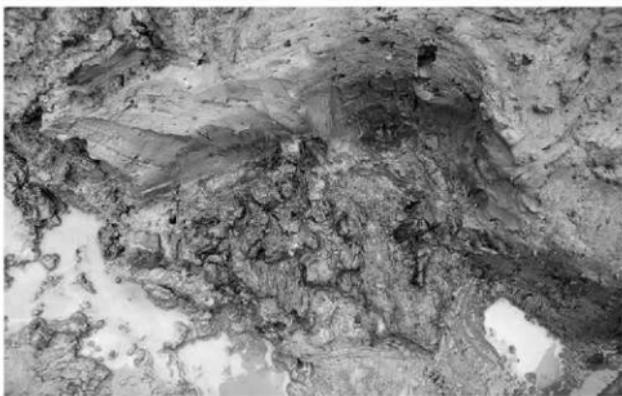
図版 2



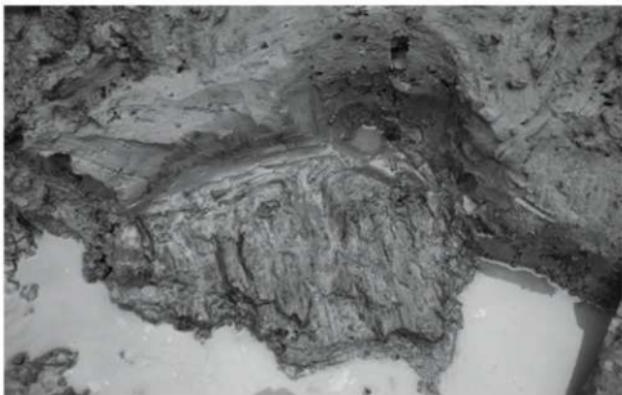
完掘状況（東から）



調査区北東側土層断面（南から）



ST01 遺物出土状況
(南東から)



ST01
(南東から)

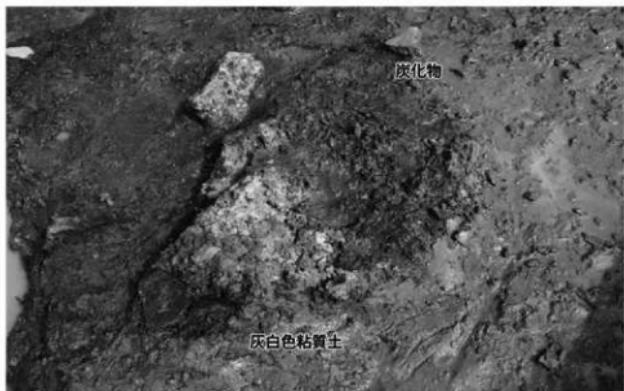


NR01-27 層上面
検出状況
(南東から)

図版 4



NR01-27 層上面
遺物出土状況
(南東から)



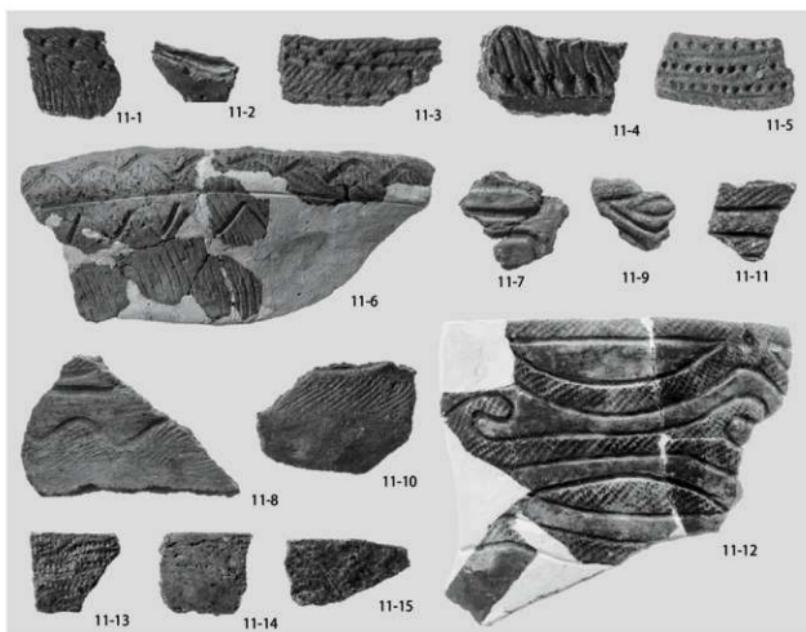
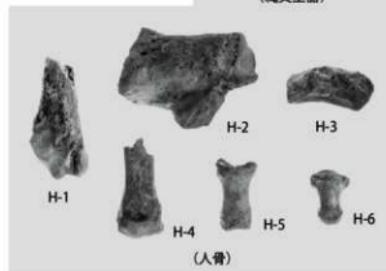
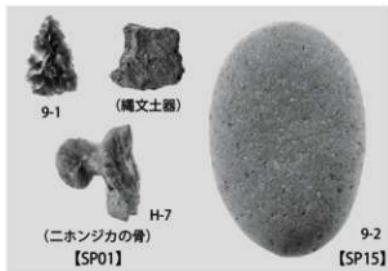
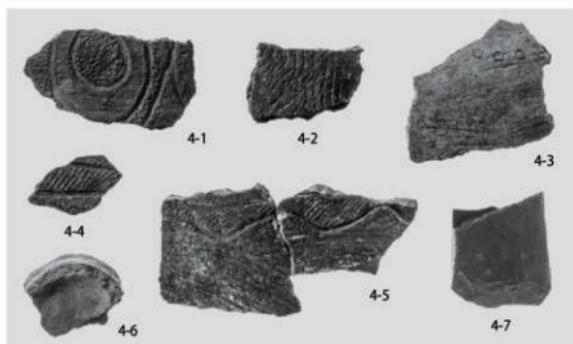
NR01-27 層上面
炭化物検出状況
(北西から)



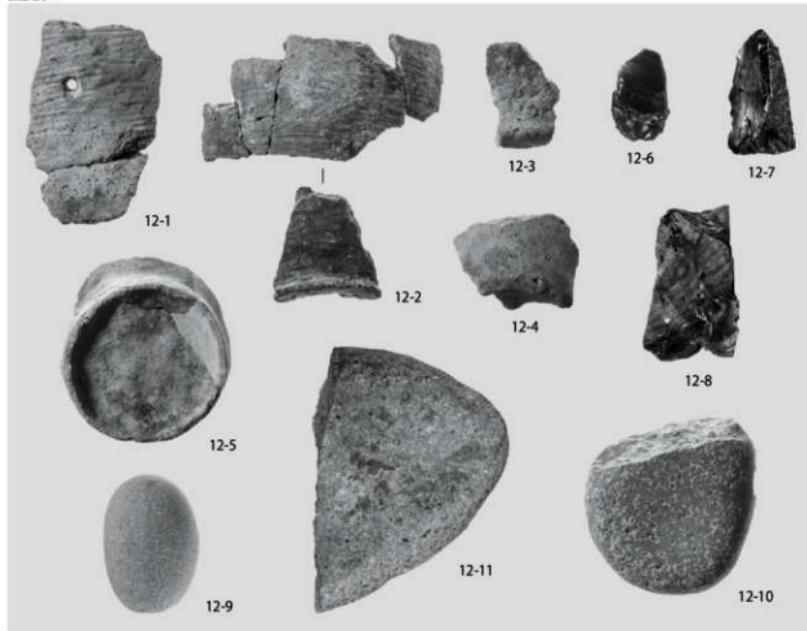
NR01 遺物出土状況（縄文土器の底部）



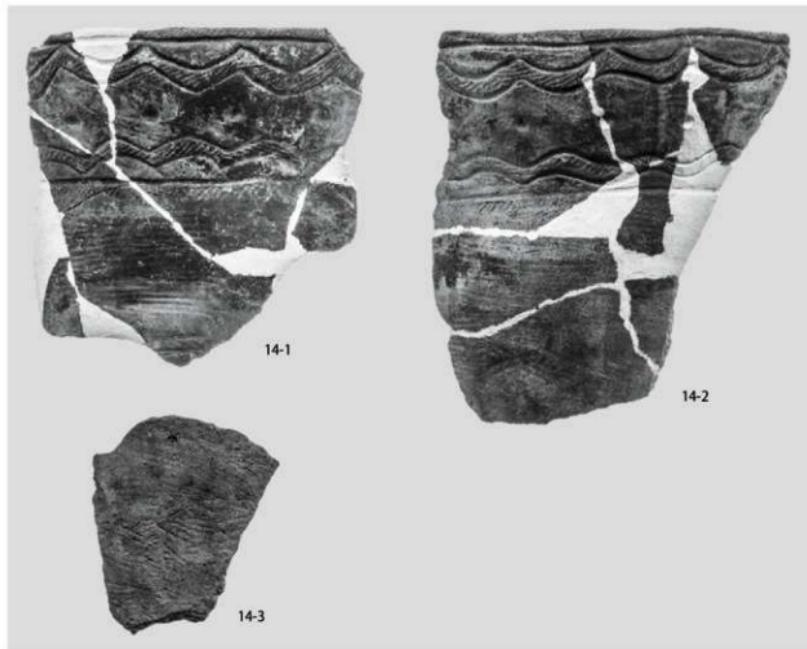
NR01 遺物出土状況（シカの下顎骨）



図版 6



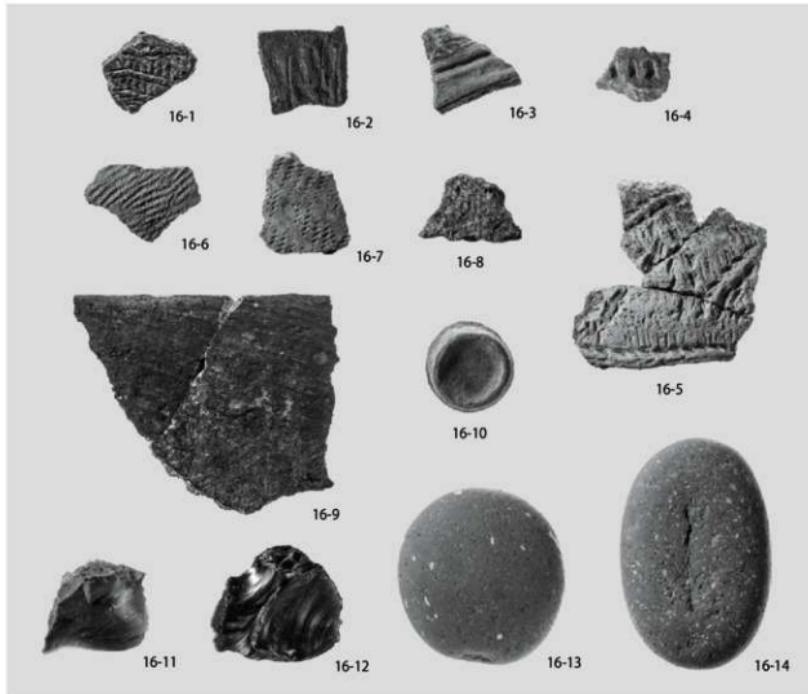
NR01-26 層出土遺物②



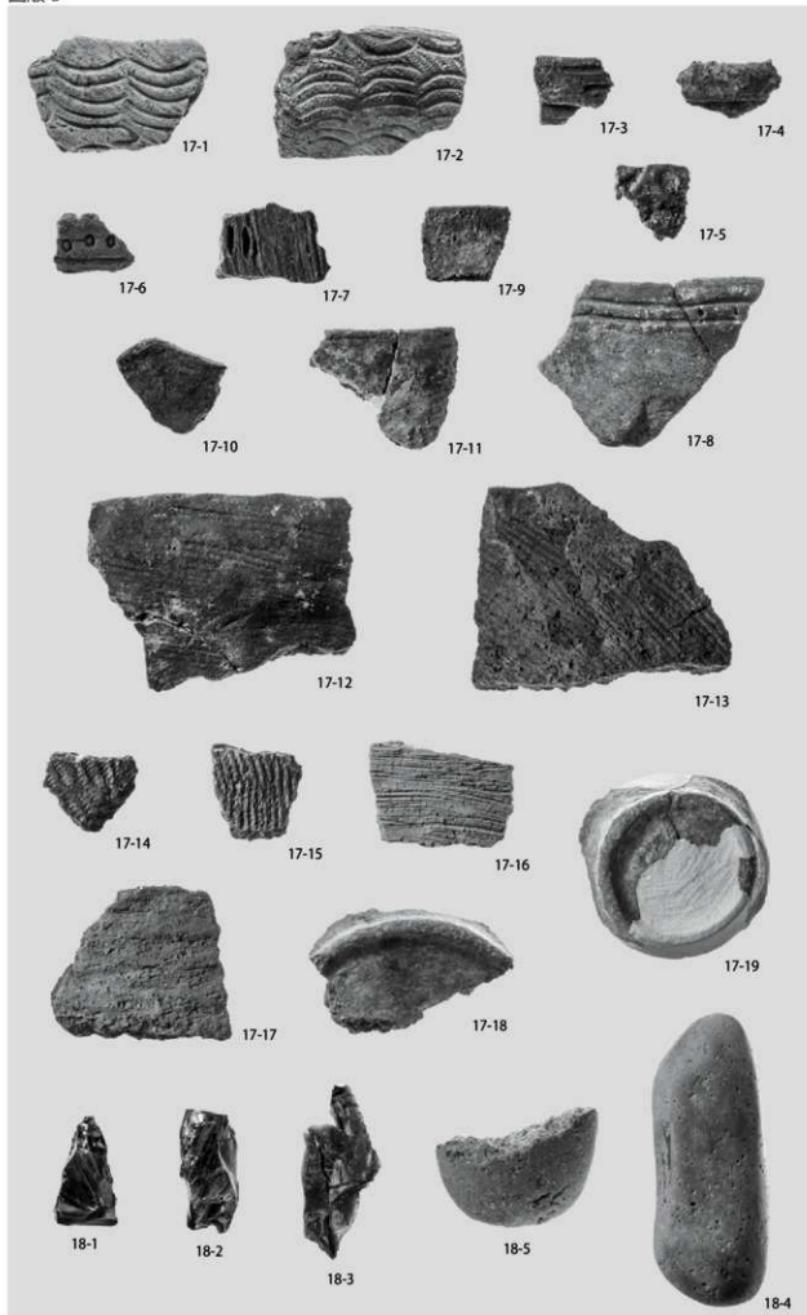
NR01-27 層上面出土遺物①



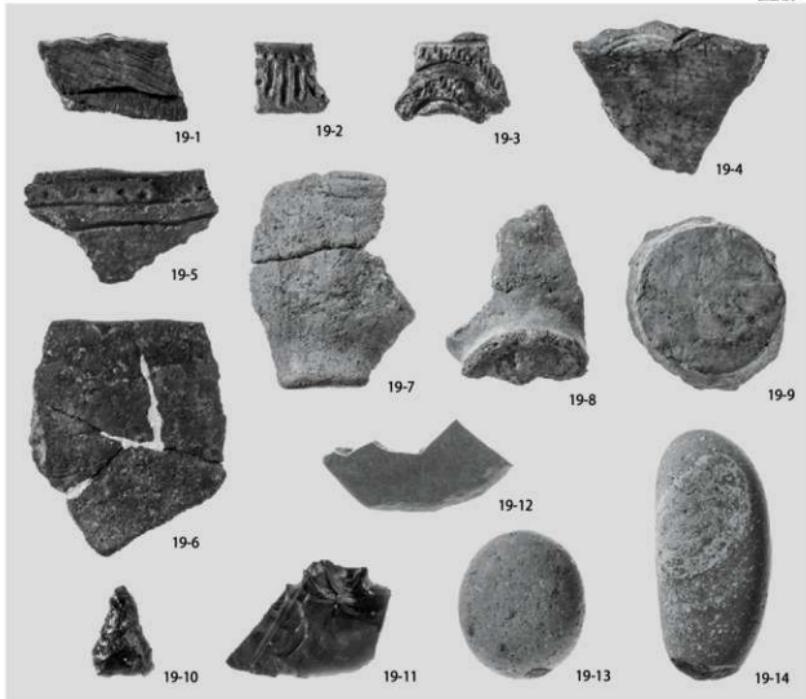
NR01-27 層上面出土遺物②



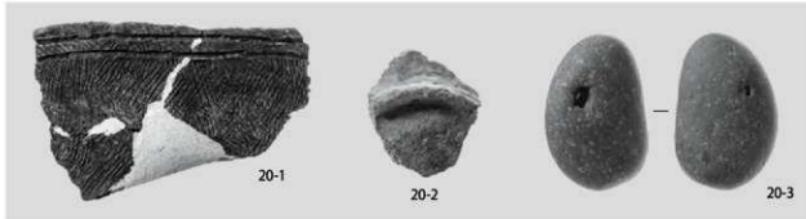
NR01-27 層出土遺物



NR01-28 層出土遺物



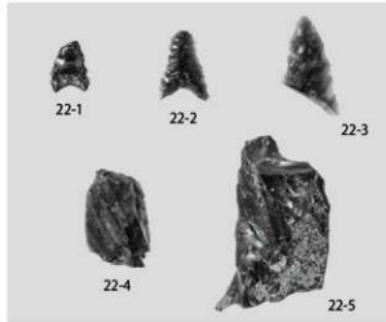
NR01-29 層出土遺物



NR01-30 層出土遺物

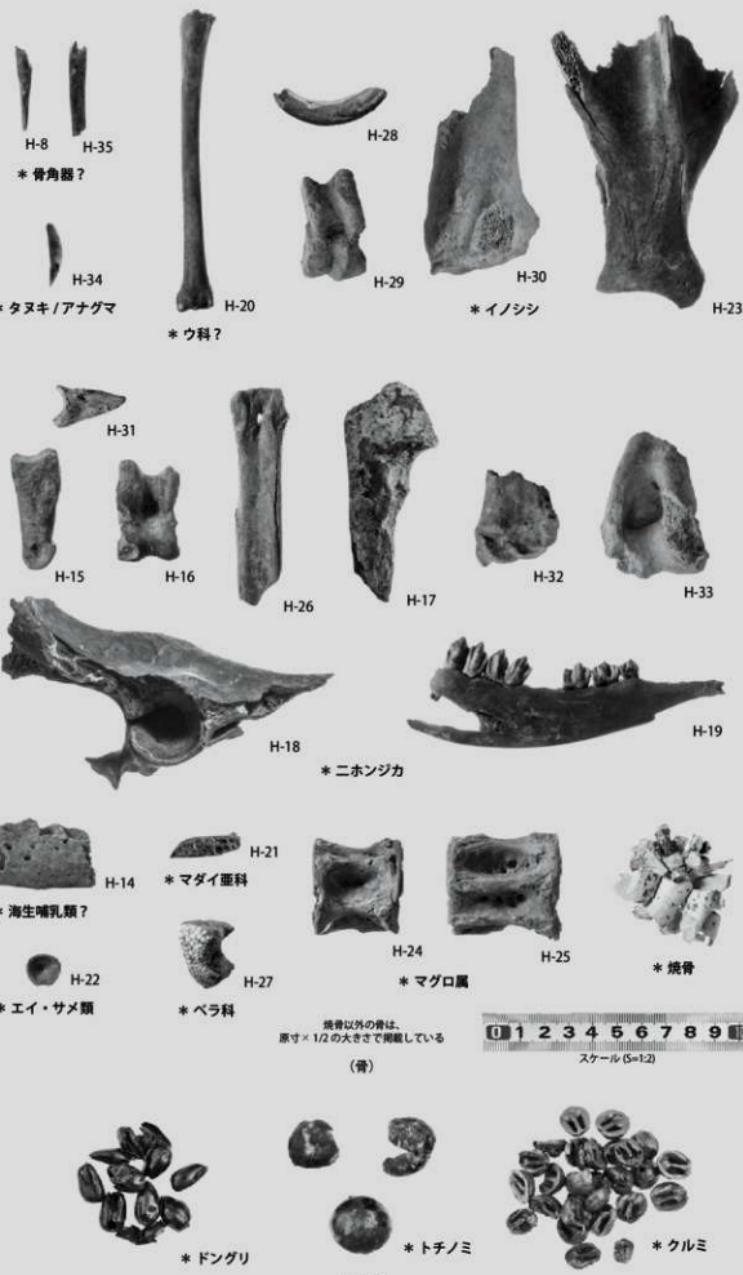


NR01-31 層出土遺物



NR01- 埋土出土遺物

図版 10



報告書抄録

ふりがな	きたうらまつのきいせき						
書名	北浦松ノ木遺跡						
副書名	松江鹿島美保関線（北浦工区）防災安全交付金（交通安全）工事に伴う発掘調査報告書						
卷次							
シリーズ名	松江市文化財調査報告書						
シリーズ番号	第174集						
編著者名	廣濱貴子 徳永隆 渡邊正巳 石丸恵利子 柳浦俊一						
編集機関	松江市教育委員会 (松江市歴史まちづくり部 まちづくり文化財課 埋蔵文化財調査室) 〒690-8540 島根県松江市末次町 86番地 TEL: 0852-55-5284						
所在地	公益財団法人松江市スポーツ振興財団(埋蔵文化財課) 〒690-0401 島根県松江市島根町加賀 1263-1 TEL: 0852-85-9210						
発行年月日	2016年3月						
所収遺跡名	所在地	コード		北緯	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号	東経			
きたうらまつのきいせき 北浦松ノ木遺跡	しまねけんまつえし 島根県松江市 みはのせきとうきょうたうら 美保関線北浦 622番地2	32201	I108	35° 33' 27" 133° 09' 30"	20140808 ~ 20140926	256.0m ²	松江鹿島美保関線 (北浦工区) 防災安全交付金 (交通安全)工事
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項		
北浦松ノ木遺跡	集落跡	縄文時代	自然流路 墓壙 柱穴群	縄文土器 石製品 動物遺存体	自然流路、墓壙1基、柱穴群を検出した。 自然流路からは、縄文時代中期後葉から後期初頭にかけての土器、石製品、獸骨、魚骨、堅果類など多数の遺物が出土した。 墓壙からは、人骨の一部が樹皮片の上に置かれた状態で出土している。柱穴群があることから、建物が建っていたと考えられる。		

松江市文化財調査報告書 第174集
松江鹿島美保関線(北浦工区)
防災安全交付金(交通安全)工事に伴う発掘調査報告書

北浦松ノ木遺跡

平成28(2016)年3月

発行 島根県松江市教育委員会
公益財団法人松江市スポーツ振興財團

印刷 松栄印刷有限会社
島根県松江市西川津町 667-1
